



TITLE:

「公議政体派」と薩摩倒幕派：王政復古クーデター再考

AUTHOR(S):

高橋, 秀直

CITATION:

高橋, 秀直. 「公議政体派」と薩摩倒幕派：王政復古クーデター再考. 京都大學文學部研究紀要 2002, 41: 1-84

ISSUE DATE:

2002-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/73103>

RIGHT:

「公議政体派」と薩摩倒幕派

——王政復古クーデター再考——

高橋 秀直

はじめに……………三

I 「公議政体派」と薩摩倒幕派

前 書……………七

一、大政奉還建白と武力倒幕計画……………九

1. 薩土盟約の成立

(1) 薩摩倒幕派……………九

(2) 土佐「公議政体派」……………一三

2. 薩土の分裂——大政奉還建白と武力倒幕計画——

(1) 薩摩倒幕派の変心……………一六

(2) 分裂以後……………二四

二、諸侯会議即時召集構想対薩摩クーデター構想

1. 諸侯会議即時召集構想の登場	二七
2. 公家倒幕派——中山構想とその挫折——	二九
3. 諸侯会議即時召集構想の敗北	三三
付論 勅命と薩藩軍事力——遠山説の検討——	三五
小括	三八

Ⅱ 王政復古クーデター

前書	四〇
----	----

一、クーデター計画の修正	四三
--------------	----

二、新政府の発足

1. 密勅	五〇
2. 御所空間の制圧	五三
3. 新政府の発足	五五
4. 王政復古の大号令	五八

三、小御所会議

1. 岩倉の一喝をめぐって	六一
2. 小御所会議の意味	六四
小括	七〇

結語——天皇原理と公議原理——

註	七四
---	----

はじめに

慶応三年一二月九日（一八六八年一月三日）、薩土尾越芸五藩の兵力が制圧する京都御所において王政復古の大号令が宣言され、新政府が発足した。そして発足直後の新政府は小御所で廟議を開き、激論の末、徳川慶喜に辞官納地を求めることを決定した。本稿の目的は、この一二月九日の政変、王政復古クーデターの実像と意味を明らかにすることである。そして同時に、これの解明の不可欠の前提作業である、クーデターにいたるまでの、いわゆる公議政体派と薩摩倒幕派の関係を明らかにすることをも目指している。

現在、私は、維新変革の政治史の再検討作業を進めており、本稿はその一環である。維新政治史は言うまでもなく複雑極まりない対象であり、明確な視角を設定しておかなければ、扱えないものである。ではいかなる視角のもとに進めているのか。その全体的な視角の一つで、本稿に特に密接に関連するものについて述べれば、それは、この時期の社会において、正当と認められた政治原理とは何であったのか、という正当性原理の視角である。このような視角に立つとき、この時期、問題となる原理は二つある。一つは天皇原理、他は公議原理である。

維新政治史における天皇原理の重要性は言うまでもない。そして、もう一つの原理である公議原理の重要性についても最近、あらためて注目されるようになって⁽¹⁾いる。ではこの二つの原理の関係はどのようなものであつたらうか。両者の比重はどのようなものであつたらうか。

これについての古典的な像は以下の通りであると言えよう。まず天皇原理と公議原理を対抗するものとしてとらえ、そのう

えて天皇原理が次第に公議原理を圧倒し、その結果、専制的な維新政権、ひいては明治国家が生まれる、である。
しかしこの像は事実だろうか。

まず問題となるのは、両者をアプリアリに對抗させる視角である。幕末・維新时期、国政において公議原理（公議機関の設置）を主張するものはほとんどすべて、それを天皇のもとにおくべきとしていた。政治構想を現実に論議する場においては両者は一対のものであったのであり、幕末における公議政体論は、正確には天皇・公議政体論といふべきものであった。両者の對抗をはじめから前提にするべきではなく、一対である両原理のなかで優位をしめるのはいずれか、と問うべきであろう。

では、かかるものと理解したうえで、天皇原理による公議原理の圧倒という像は事実だろうか。これの再検討は、維新政治史全体を通してなさなければならないものであるが、本稿はその手始めとして、明治国家の生誕の瞬間である王政復古クーデターについてこれを明らかにしようとするものである。

王政復古クーデターを検討するにあたり注目すべきは、いわゆる公議政体派の存在である。クーデターの中心は言うまでもなく、大久保利通・西郷隆盛ら薩摩倒幕派、岩倉具視・中山忠能・正親町三条実愛・中御門経之ら公家倒幕派である。しかし、クーデターには彼らのみではなく、土佐、越前、尾張、安芸など「公議政体派」⁽²⁾も参加していた。なぜ彼らに注目すべきなのか。その理由は第一に以後の政治過程を理解する前提としてである。クーデターで設立された新政権、王政復古政府において「公議政体派」は薩摩倒幕派と激しく対抗し、それを次第に圧倒していくのは周知のことである。なぜそれが可能だったのか。これを理解するには、新政権発足時の双方の政治的力量を確認しておく必要があるだろう。第二は、右に述べた正当性原理の視角からである。クーデターにおける正当性原理を考える場合、天皇の身柄を握りそれを利用しうる両倒幕派に対し、公議の場である廟議に参画し公議原理の主たる担い手となったのは彼ら「公議政体派」であった。彼らの政

治的重みを見ることで、クーデターにおける二つの正当性原理の比重を測ることができるだろう。

王政復古クーデターにおける「公議政体派」のはたした役割やその政治的比重を検討するためには、そもそもなぜ彼らがクーデターに参画したのかが明らかにされねばならない。王政復古政府において慶喜擁護に動いた彼らがなぜ、薩摩倒幕派の計画に参画したのだろうか。一見、奇妙なこの事態を理解するためには、この参画にいたるまでの「公議政体派」と薩摩倒幕派の関係の展開、すなわちクーデター前史の把握が必要となる。したがってこれが本稿の第二の主題となるのである。

この時期の「公議政体派」の中心となり、もともと活発に動いていたのは土佐藩であった。多くの藩にもれず土佐藩内部の政情も複雑で、「公議政体派」が完全に主導権をにぎっているわけではなかった。しかしそうしたなかにもかかわらず、この時の中央政界で土佐藩を事実上、代表していたのは後藤象二郎であった。そこで本稿では、「公議政体派」の動きについては、後藤に焦点をあてて検討することにする。

以上の検討をなすうえで何よりも必要となるのは、政治過程の事実経過の把握である。これについては戦前の官製維新史学が一つの像を提示している。戦後、明治維新史研究は天皇制の束縛から解放されることで、戦前と相貌を一新する顕著な成果をあげた。しかし、政治過程の具体的な経過については、新たな事実の解明が進められ大きな進展が見られはするが、その根本的書き換えにはまだいたっていないように思われる。本稿の対象とする時期においては、王政復古クーデターについてとくにそう言うことが出来る。

こうした政治過程の事実経過の解明はなぜ遅れたのか、その要因の一つには、戦後歴史学の方法論や関心の所在、といった史学史的に別に検討すべき重要な問題があるが、また一つには戦前官製史学が膨大な史料の蓄積を背景に、それなりに高い実証水準の事実経過像を作り上げていたことがある。しかし、いかに膨大な史料蓄積を背景にもつものであろうが、編纂、解釈の過程で時代拘束による歪みは逃れ得ないはずである。一次史料までおり、基本史料をあらためて正確に読み直すこと

により、官製維新史学の乗り越えをなす必要があるだろう。

本稿の構成は以下の通りである。Ⅰ章は薩土盟約から王政復古クーデターへの参画にいたるまでの「公議政体派」と薩摩倒幕派の関係を明らかにする。Ⅱ章はクーデターの実像の解明である。そして結語で以上をふまえ兵庫開港勅許より王政復古クーデターまでの正当性原理について考察することにする。

なお幕末政治史について私はすでに「討幕の密勅と見合わせ沙汰書」(『日本史研究』四五七号、二〇〇〇年一〇月)・「王政復古への政治過程」(『史林』八四卷二号、二〇〇一年三月)を発表している。これらは本稿と密接に関連しているもので、本文中でたびたび言及することになるが、前者を拙稿A論文、後者を拙稿B論文と表記することにする。

〈付記〉典拠については以下の通りに略記する。正統の日本史籍協会叢書は書名のあとに〈史〉と、国立国会図書館憲政資料室所蔵の文書は文書名のあとに〈憲〉と記す。「大久保利通日記」(黎明館編『鹿児島県史料 大久保利通文書』一、鹿児島県、一九八七年)は「大久保日記」、立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書』(吉川弘文館、一九六五～一九七一年)は『大久保利通文書』〈立〉、「嵯峨実愛手記」(『史書雑纂』〈史〉二)は「嵯峨手記」、末松謙澄『修訂防長回天史』(一九二一～一九一九年)は『防長回天史』、「寺村左膳手記」(『維新日乗纂輯』〈史〉三)は「寺村手記」、横田達雄編『寺村左膳道成日記』(県立青山文庫後援会、一九八〇年)三は『寺村日記』、「神山郡廉日記」(東京大学史料編纂所蔵写本)は「神山日記」と略記する。また、中根雪江「丁卯日記」は『再夢紀事』〈史〉(東京大学出版会、一九七四年復刻)版による。

史料引用にさいしては、句読点を適宜、付し、旧字体を新字体に、変体仮名・片仮名は原則として平仮名にし、々は「より」、而は「て」、者は「は」とした。またカッコ・傍線・傍点は断らない限りすべて高橋による。

I章 「公議政体派」と薩摩倒幕派

前 書

薩摩倒幕派と「公議政体派」との関係はいかなるものであったのか。慶応三年前半、薩摩は土佐・越前・宇和島と結び平和的改革を幕府に迫っていた。いわゆる四侯会議である。しかし、五月二四日、四侯の建白を無視し徳川慶喜は強引に兵庫開港の勅許を獲得した。その翌日、薩摩の主導権を握っていた倒幕派、小松帶刀・西郷隆盛・大久保利通らは長州と提携しての武力挙兵を決意したのである。

これ以後、王政復古クーデターにいたるまでの土佐「公議政体派」と薩摩倒幕派の関係の概略を述べれば以下の通りとなる。六月二二日、両派は薩土盟約を結び、共同して大政奉還建白を行うことにした。しかし、いったん土佐に戻った後藤の帰京が遅れたため建白は行われなかった。九月上旬ようやく後藤は帰京したが、その後藤に薩摩側は建白は行わず直ちに挙兵すると通告し、あくまで建白論をとる土佐側と対抗関係となる。この対抗は一〇月一三日、慶喜が大政奉還の意向を表明したことではいったんは消える。しかし諸大名が召集に応じないため、新政体はいっこうに樹立されず、政局は混迷する。そうしたなか薩摩倒幕派は一月下旬、軍事クーデターを計画する。いっぽう、土佐「公議政体派」はこれに対抗し、新政体樹立のためただちに諸侯会議を召集することを構想するが、結局、一二月二日、薩摩のクーデター計画に参画することに合意する、である。

このように複雑に交差する両勢力をどのように捉えるべきだろうか。この問題を検討するにあたって出発点となる古典的

研究として、遠山茂樹『明治維新』（岩波書店、一九五一年、本稿は『遠山茂樹著作集』版、一九九一年による）と原口清『戊辰戦争』（塙書房、一九六三年）の両著作をあげることができるだろう。

遠山『明治維新』は以下のように述べる（九八頁）。大政奉還運動は、時局の平和的解決の途で、その実現は土佐のヘゲモニーさらには幕府の実権の保持につながる。一方、倒幕運動は武力的解決の途で、薩長のヘゲモニー、徳川権力の著しい削減となる。両者は本来、「王政復古の二つの対立的な方策」であつたが、それにもかかわらず、それが真に対立として闘われることはなかつた。「どちらの側も、強い自藩中心の派閥意識から、互に探り合い、だまし合い、だし抜き合いながら、結局妥協し合うという、虚々実々の腹芸的駆け引きに終始した」。すなわち、遠山氏は、徳川権力の保持か削減かを争点に両派を本来はげしく対立すべきものであつたとする。そして、現実にはそうした対立とならなかつたのは、自藩中心の派閥主義に原因があつたとするのである。

このように両勢力の本来の対立性を強調した遠山氏に対し、原口『戊辰戦争』は、その共通性をまず確認する。すなわち、より強力な中央政府をめざし、そのために幕府を廃止すべきと両派がともに考えていたことを示すのである。しかしそのうえで氏は相違点を指摘する。その相違点とは、その手段として戦争に訴えるか、あくまで平和的方法をとるのかという点であるとする。そしてこの相違は、自藩の存亡を賭けるか否か、自藩をより高次の価値に奉仕する道具と見るか否かの違いを意味し、その違いはさらには自藩の封建的領有権をそのまま維持する⁽³⁾のか、より高次の全国的領有権への統合をめざすのかにもつながる、とする。

両著作は力点の置き方は違うが両派の相違点を強調している。このように理解すると、薩土盟約の薩摩による「返約」、両者の対抗は自然であり、逆に王政復古クーデターへの土佐「公議政体派」の参画はまことに奇妙な事態となる。しかしこれは事実だろうか。以下、本章でこれを検討していくことにする。

一、大政奉還建白と武力倒幕計画

1. 薩土盟約の成立

(1) 薩摩倒幕派

兵庫開港の勅許が出された翌日の五月二五日、京都の薩摩藩邸の倒幕派幹部は長州と提携しての武力挙兵を決意した。しかし將軍慶喜のもと、急速に改革を進めつつある幕府を相手とする挙兵は容易ならぬ軍事的冒険である。あえてこうした決断をなした薩摩倒幕派の戦略はいかなるものであったろうか。

このときの薩摩倒幕派の作戦は、八月一四日の長州藩士の柏村信・御堀耕助に対する説明に示される（『防長回天史』五篇下、三四八頁）。それは、京都・大坂・江戸（正確には江戸周辺の関東）で一斉に徳川方を攻撃しようという「三都一時事を挙げ候策略」であった。江戸における作戦は上方への兵力増援を阻止する支援作戦であり、中心は京都・大坂である。御所を軍事的に制圧し、天皇の身柄を押さえるとともに、会津藩邸・堀川辺の幕府屯所・大坂城・徳川方軍艦（兵庫港停泊）など京・大坂の徳川方拠点を攻撃しようというのが上方での作戦計画であった。そして薩摩側が「素より少数に付、不意に起り不申では仕損じ候間、急挙を専一」と述べるように、この計画の鍵は奇襲にあった。

上方での作戦のより詳細な見通しは、六月二四日付の黒田清綱（鹿児島）宛黒田清隆（大坂）書簡（鹿児島県維新史料編さん所編『鹿児島県史料 忠義公史料』四、鹿児島県、一九七六年、四二二頁）に述べられている。京都だけなら在京兵力のみで不足はないが、⁽⁴⁾ 挙兵は京都・大坂同時になさねば成功は難しい。大坂攻撃のため国元より精兵一大隊と大砲を派遣してほしい。大坂城への幕府側警備はまったく空虚で歩兵三大隊、砲兵一座八挺位にすぎず、この機会に大坂城を抜くこと

は掌中である。また兵庫港へは二小隊を蒸気船で派遣し大坂と同時に攻撃したい、である。

このように上方の薩摩倒幕派の挙兵計画は、対徳川全面攻撃案であり、最初の攻撃で、上方にいる慶喜以下の幕府幹部を殲滅できなければ全国的内戦は不可避であつたろう。⁽⁵⁾

薩摩倒幕派は五月末より挙兵準備をはじめていた。しかしそれにもかかわらず、六月二三日、即時挙兵ではなく、慶喜に大政奉還建白を行うことを内容とする薩土盟約を結んだ。盟約は一見、挙兵計画と矛盾するように見える。しかしそうではなかった。盟約は土佐側からもかけられたものであつたが、その時の後藤の論理は、大政奉還を建白しても慶喜は決して応じないだろうからそれを機に挙兵すべきである、というものであつたのである。つまり、建白↓慶喜拒否↓挙兵、のシナリオである。このシナリオによれば、建白は薩摩倒幕派に挙兵の名分と同志としての土佐を与えるものであり、武力倒幕構想となんら矛盾するものではなく、むしろそのための戦術であつたのである。⁽⁶⁾

このシナリオの前提は慶喜の建白拒絶である。薩摩倒幕派はこれを確信していた。では、かれらはさらにこれを期待していただろうか。大政奉還は幕府政治の否定論であるとともに、天皇・公議政体の樹立につながるものである。建白に慶喜が応じるならば、幕府制度の廃止は約束される。したがってこの拒絶を期待するということは、単に政体の移行を望むのではなく、その移行が平和的ではなく、軍事的に、内乱をへて行われることを望んでいたことを意味することになる。薩摩倒幕派は単に倒幕ではなく、まさに武力倒幕を望んでいたのだろうか。大政奉還により薩摩倒幕派は肩すかしをくわされたとする理解が一般的であることに示されるように、これを肯定する見解が研究史において主流であるといえよう。しかしそれは妥当だろうか。

この問題を検討するにあたっては、研究上の概念としての倒幕という用語についての本稿の用法を述べておく必要があるだろう。多くの学術用語と同じく、この語もかなり多義的に、曖昧に使われてきており、これを明確にしておかないと無用

の混乱をまねく恐れがあるからである。

概念としての倒幕は二つの次元に関わる。一つは政治体制の次元。他は政治勢力としての徳川氏のあり方の次元。前者について言えば、これまでの幕府政治を否定し、天皇を頂点とする政体をつくるということをその内容とすることができらう（天皇を頂点とする新政体の具体像を問題にするなら、さらに様々な分類が必要となるが、この慶応三年後半においては、天皇・公議政体の樹立がほぼ合意事項となっていた）。そして、後者については、三つの異なる考えに分けねばならない。一つは、幕府をもはや国家の最高意志決定機関とせず、天皇を中心とする新機構にそれをかえるが、その新機構の決定を中心となって執行するのはなお幕府である、という行政機構としての幕府存続論。また一つは行政機構としての幕府も否定し、徳川氏を他と同じ一大名とするが、それが関東一円の大大名として存在することは構わないとするもの。最後は大大名としての徳川氏の存続をも認めず、これを抹殺するか、あるいは領国を大幅に削減しようというものである。ABCの符合をつけ整理すると以下のようになる。

A型倒幕論 最高意志決定機構としての幕府は否定するが、行政機構として幕府の存続は認める

B型倒幕論 行政機構としても幕府を否定するが、大大名としての徳川氏の存続は認める

C型倒幕論 大大名としての徳川氏の存続をも否定する

そして個々の政治勢力の現実の政治路線を分析するにあたっては、右の倒幕論を達成するためにいかなる手段をとるのかという問題も視野にいれる必要がある。具体的には、軍事力を行使するか否かである。抽象的に考えれば、ABCすべてについて武力行使と不行使（平和的説得、もしくは圧力）を想定することができ、現実には手段と目的の密接に関係している。例えば、C型倒幕論を実現するには武力行使は不可欠だろうし、また、逆に武力を行使してしまったり、A型倒幕論にその目標を留めるのは、不可能ではないとしても困難となるだろう。

以上の定義をふまえて、薩摩の政治路線を位置づけるならば、慶応三年前半の四侯会議におけるそれはB型と位置づけることができよう。そして四侯会議が挫折すると、薩摩倒幕派は武力行使を決意することになった。そしてそれに応じて、倒幕論もB型からC型に移行した。すなわち、大政奉還前の薩摩倒幕派の対徳川政策を示す史料としては、討幕の密勅があるが、そこで述べられているのは慶喜の抹殺であり、まさにC型倒幕論であるからである。慶喜の抹殺は平和手段によっては実現出来ず、武力行使が不可避であろう。薩摩倒幕派が望んだのは、単なる倒幕ではなく、武力倒幕であったとする通説が妥当なように見える。

しかしそうではないと思われる。薩摩倒幕派の倒幕論がB型からC型に移行したのは、積極的にそれをめざしたというよりも、武力行使という手段をとる以上、そうせざるをえなかったからである。そして挙兵を決意したのも、それ自体を目標としたわけではなく、平和的にB型を遂行することへの展望が失われたからであった。したがって、四侯会議において期待したように、もし平和的にB型倒幕が達成されるなら、彼らはそれに賛同したと思われるのである。

以上の推測について根拠を挙げれば以下の通りとなる。

第一に、武力行使自体が目標であったなら、慶喜の大政奉還は肩すかしであり、不満なものとなるはずであるが、現実には、大政奉還後、一月下旬にいたるまでの薩摩倒幕派の京都における行動は、大政奉還の現実化をめざすものであったこと。(拙稿B論文、二二―二八頁)。

第二に、王政復古クーデター直前、西郷・大久保ら薩摩倒幕派幹部の慶喜への評価は上がり、平和的な新政権樹立、慶喜の議定任命をも予想していたこと。(家近良樹『幕末政治と倒幕運動』、吉川弘文館、一九九五年、二五二、三頁・拙稿B論文、三二頁)

第三に、武力行使をめざしているならクーデターは挑発であり、当日、徳川側(会桑)が反撃に出なかったことは期待外

れと捉えられるはずであるが、実際にはそうではなく、松平春嶽・徳川慶勝の周旋活動に西郷・大久保らは期待を示していること。(本稿、註(54)で述べる)。

つまり薩摩倒幕派は建白の拒絶を確信していたが、期待していたわけではなかったのである。したがって、このときの彼らの倒幕論を位置づけるなら、B型への移行の可能性をふくむC型とすることができよう。⁽⁷⁾

(2) 土佐「公議政体派」

土佐の山内容堂は四侯会議に参加すべく五月一日上京した。しかし四侯は慶喜に翻弄され、成果をあげられず、容堂は体調不良を理由に五月二七日、離京した。これと入れ替わるように六月一三日、後藤象二郎が長崎より上京し、以後、大政奉還建白運動が始まるのである。大政奉還建白構想の特徴は、第一に幕府に政権を朝廷に奉還させ、今後の政治は朝廷に設置された公議機関により行おうという天皇・公議政体樹立論、第二はそれを慶喜に対する説得(建白)により実現しようという内乱回避、平和的政体移行論であった。しかし、この構想は矛盾、あるいは曖昧さをふくむものであった。すなわち、もし慶喜が説得に応じないときはどうするのかの問題である。そして後藤はこの曖昧さを薩摩倒幕派説得に利用し、彼自身は望んでいない拒絶→挙兵のシナリオを薩摩側に語ったのである。

薩摩倒幕派にとって大政奉還建白とは挙兵への戦術であった。では後藤自身、土佐「公議政体派」にとってはどうであったのだろうか。彼が内心、内戦回避を強く望んでいたことは確実である。しかし、家近良樹氏が指摘しているように建白構想は、後藤の個人的願望は別として慶喜拒絶の場合、挙兵への方策を提供するものであった(家近前掲書、一九九頁)。薩摩は拒絶を確信し、後藤も薩摩にそのように語っていた。しかし、後藤は内心ではそれを確信していたわけではなく、受諾の可能性があると見ていた(以上、同書、二〇二、三頁)。しかし、それはあくまで可能性であり、客観的に見るなら拒絶

に比べより小さい可能性であつたろう。当然、その場合の対応も後藤の意識のなかにはあつたであろう。それはいかなるものであつたろうか。

その場合は挙兵するというのが薩摩倒幕派への後藤の発言であつた。建白構想が土佐の国論とならなくとも自分と同志だけは参加する、とまでそのさい後藤は語つたようである（『防長回天史』五篇下、三五二頁）。こうした発言は薩摩のみになされたものではなく、宇和島・安芸・越前さらには土佐藩内部にもなされた模様である。⁽⁸⁾

挙兵について後藤は重い言質を負つていた。そしてそれは後藤のみならず土佐藩の立場からもなさざるをえないものとなつていたろう。政界が注視するなか、大政奉還建白を行つたのに、慶喜に拒まれたからといってそのままに放置したならば（しかもともに建白した同志の藩を見捨てる形で放置したならば）、土佐の対外的信用や威信は決定的に傷つくだろう。さらに対外的な面子以外にも、藩内で勢力を拡大しつつある乾退助ら武力倒幕派がおさまらず内訌が生じかねないだろう。⁽⁹⁾ 拒絶→挙兵のシナリオは薩摩説得のレトリックではなく、土佐「公議政体派」にとつても議論の前提だったのである。

大政奉還建白は単なる平和路線ではなく、拒絶された場合は、開戦とならざるをえない施策、言わば劇薬であり、自藩の存亡を危険にさらすものであつた。これは、後藤にとり不可避な方策ではなかつた。五月よりの薩摩の挙兵を動きを放置した場合、それで内乱となつたとしても、土佐の出方は多様なはずで、極端に言えば傍観という方策もとリエただろう。しかし、自らの考案をもつて中央政界に乗り出してしまった以上はそうした傍観は不可能となり、まさに当事者として内乱に参画せざるをえない。幕末、中央政局に乗り出すことは、政治的発言権を高めることであつたが、同時に重い財政的な負担、政治的危険を担うことでもあり、容易なことではなかつた。この慶応三年の一〇月、越前や宇和島のようなこれまで中央政界で活躍した雄藩でさえ、国主上京に強力な反対論があつたことにそれは確認できよう（『丁卯日記』、二二〇、一・二四〇、一頁）。そして結局上京した松平春嶽や伊達宗城と違って、ほとんどの諸侯は大政奉還後や王政復古クーデター後の召命に

応じなかったのである。大政奉還論を携えての後藤の登場はまさに危険な行為であり、自藩の生き残りのみをはかる自藩第一主義からとれる行動ではなかった。

なぜこのような危険な方策にあえて後藤は乗り出したのだろうか。一つの要因には薩摩の即時挙兵論への対抗があった。後藤は内乱回避を強く望んでいた。しかし、この六月、二条城襲撃説など薩摩の即時挙兵の噂が広まっている（『寺村手記』、四七五、六頁）。こうした即時挙兵を防ぐために、将来の挙兵の危険をふくむ建白論をあえて提唱した⁽¹⁰⁾という側面もあるだろう。しかし、大政奉還論の原型である坂本竜馬の船中八策が長崎より京都に向かう船の中で考案されたことに明らかやうに、政体変革に向けて積極的に動こうという後藤の意思は着京前すでに固まっており、京都の政情を見てにわかに発案したものではない。天皇・公議政体の樹立と内乱の回避は後藤の二つの目的であったのである。そして、その動機から生まれる自然な方策は、説得による政体移行論である大政奉還建白構想であった。しかし、慶喜応諾の可能性は決して高いものではない。失敗の場合は挙兵をも覚悟せざるをえない。しかし、緊迫した情勢のなかその目的を達成するために、あえてそれに賭けようと言うのが、このときの後藤の決断であったと思われる⁽¹¹⁾。

後藤のこの大政奉還建白構想は、徳川権力温存策であったろうか。たしかに慶喜の大政奉還以後、後藤は慶喜を新政体の中心にすえるべく薩摩に対抗し奮闘した。しかしそれをそれ以前に遡及すべきではないだろう。六月一七日もしくは二二日、大政奉還構想を伊達宗城に説明するにあたって後藤は新政体で徳川氏のしめる位置について、「幕府は関東の大諸侯として天下之政権を解、自国退守之事」と述べており（『土藩後藤象次郎御政体御変革之所見大意書取』、『伊達宇和島家史料』乙記録八五、東京大学史料編纂所蔵写真本）、新政体の中心とは考えていないのである⁽¹²⁾。

後藤が建白構想を提起したのは兵庫開港・長州復権問題で薩摩・土佐・越前・宇和島の四藩の意向を慶喜が無視した時期であり、慶喜への評価は薩摩以外においても高いものではなかった。伊達宗城は王政復古クーデター以後、「公議政体派」

として慶喜擁護に動く人物であるが、この段階における彼の慶喜評価は冷めたものであり、幕府が兵力を増強し諸大名の圧倒屈服をはかり朝廷をも拱手させようとしている、との高鍋藩土坂田莠の情報について、「浸々然と幕猛威を更張する之密策也」、とそれを信じる感想を記している（『伊達宗城在京日記』〈史〉七月二六日）。そして大久保との間で、幕府の処置は油断できないゆえ互いに見聞をつくし分かった情報は通達しあおうとの約束を交わしていた（同七月二四日）⁽¹³⁾。

大政奉還以後の後藤や宗城ら「公議政体派」が慶喜を擁護するようになるのは、政権放棄という意外な決断で彼の評価が上がり、一徳川勢力の利害を超え、徳川勢力から薩長までも結集する挙国一致体制の実質的中心として、全体を配慮した政治をなしうる人物であると期待するようになったからであって、これまでのような徳川勢力の全国支配の維持、ましてや、徳川絶対主義といったものを、大政奉還において実現をしようとしたわけではないのである。

この時期の後藤の建白構想は最初に述べた倒幕論の類型で見るとすれば、それは大大名としての徳川氏の存続を認めるB型倒幕論とすることができよう。ただし、後藤の構想は慶喜拒否の場合、開戦につながるものであり、そうなればB型に留まることはかなり困難となる。したがってC型への移行の可能性も含んだB型倒幕論と位置づけることができるだろう。

2. 薩土の分裂——大政奉還建白と武力倒幕計画——

（1）薩摩倒幕派の変心

大政奉還建白についての薩土の盟約は実行されず、九月、薩土の政治行動は分裂することになる。薩土盟約の段階では後藤の構想はまだ土佐藩の正式な国論となっていなかった。容堂の承認を得るため七月三日、後藤は京を離れたが、そのさい国元の意向を固めたうえ、一〇日後に帰京すると薩摩側に約束していた（『防長回天史』五篇下、三五〇頁）。しかしこの約束は果たされなかった。建白提出への容堂の承認は得られたが、長崎で起きたイギリス船員の殺害事件の処理などで帰京は

大幅に遅れ、後藤が大坂に着いたのは九月二日、しかも建白に軍事的威圧を加えるべきでないとする容堂の反対のために兵力を帯同していなかったのである。⁽¹⁴⁾戻ってきた後藤は九月三日、七日と薩摩側と会談したが、七日の席で西郷は盟約の「返約」を通告した。すなわち、大政奉還建白は行わず、ただちに挙兵する旨を後藤に告げたのである。これに対し後藤は即時挙兵に反対し、あくまで大政奉還建白の実行を主張したが、薩摩側は応じなかった。（『寺村手記』、四八一、二頁）。

この九月における薩摩の大政奉還路線の放棄については、これまでその理由を土佐の対応、違約に求める見解が通説であった。違約とは、1、後藤の帰京が大幅に遅れたこと、2、約束の兵隊を連れてこなかったこと、3、軍事手段を使わずあくまで平和手段をとることを宣言したこと、である。

これに対し、最近、家近前掲書が登場し、通説を批判し、薩摩自身に放棄の要因を求める新見解を提示した（第五章第二節二）。土佐側要因説について家近氏の批判は以下の通りである。1の遅延については、薩摩側もイギリス水兵殺害事件が問題となっていることを知っており、遅延を予想し容認していたこと、2の不帯兵については、たしかに軽視できない要因であるが、後藤は将来の出兵までは否定したわけではなく、すぐ出兵できる体制を整えている、と薩摩側に発言しており、決定的要因とみなしがたいということ、3については、容堂は建白にあたっての出兵は認めなかったが、「今後之模様」による出兵は認めその準備を藩内に指示しており、拒絶↓挙兵のシナリオは認めていたことである。

そして家近氏が提示される薩摩倒幕派自身の事情とは、挙兵にむけて同盟関係にある長州藩士等の突き上げ、京都に集結している浪士層における急進論の台頭、挙兵をめぐる藩邸内の意見対立の先鋭化であり、これにより、建白を出して後、幕府の解答が出るまで待つという時間的余裕をもてなくなり、後藤帰京前の八月中旬、大政奉還建白構想を放棄し即時挙兵論に転じていた、というのである。

土佐側要因説の批判や、後藤帰京前に薩摩側が即時挙兵を望むようになっていたとの指摘など、家近氏の主張は説得的で

あり、また、容堂も拒絶↓挙兵のシナリオを認めていたとの主張も重要である。この問題についての研究はここに新局面を迎えたと言えよう。そこで本稿では家近説をふまえこの問題にさらにふみこんで見ることにする。その場合、気づく問題点は、第一に八月に即時挙兵論に転じたとして、なぜ彼らは後藤の帰京を待ったのか、ということである。即時挙兵を決意したのなら、土佐には説明の使者を送り、直ちに挙兵準備に着手するのが自然な方策であったのではないだろうか。しかも、後藤が上京してきても、彼が薩摩の即時挙兵論に賛同するかは分からない。かえってその障碍になる可能性さえあったろう。この点からも速やかな挙兵が望ましい。しかし彼らはそうなせず、「南海之快風もいかゞ哉と夫のみ相待申候」と当時、薩摩藩邸にいた長州の品川弥二郎が国元に書き送っているように、⁽¹⁵⁾ 後藤の帰京をじりじりと待っていたのである。これはなぜか。

第二は薩摩側の変心の要因の解明である。浪士の突き上げはあっただろうが、より重要な長州側について見れば、右の品川書簡にあるように、後藤の帰京を待っており、即時挙兵を主張したわけではなく、また、薩摩藩邸の分裂は、逆に挙兵の阻止要因と見ることもできるだろう。八月の薩摩倒幕派の動向についてさらなる検討が必要と言えよう。

薩摩倒幕派の動向について、いつ彼らが即時挙兵論に転じたかをまず見ることにする。上京してきた長州藩士柏村信と御堀耕助に対し八月一四日、薩摩倒幕派はその戦略を詳細に説明している（『防長回天史』第五編下、三五〇頁）が、それは建白↓拒絶↓挙兵という薩土盟約のシナリオであり、なお建白構想にたっていることが明らかとなる。そして彼らが即時挙兵論を希望するようになったのをはつきり確認できるのは八月三〇日である。以下これについて考証する。

右の一四日の長州側への説明で薩摩側は「同志之堂上方」の存在について言及している。それが公家倒幕派で彼らは薩摩・土佐とともに建白構想の参画者であった。公家倒幕派はこの時期、武力倒幕を望んでおり、その担い手として薩摩・土佐に期待をかけこの提携となったのである。八月三〇日、公家倒幕派の一員の中御門は同じく公家倒幕派の正親町三条を訪

れ、政情について様々な情報を話しているが、その中には以下の内容があった（「嵯峨手記」）。

一幕泰山安枕策は、正かの時彦城御遷坐のこと、一同上に付き、会人彦へ行向のこと、一薩退候様、仏人薩へ下向、軍器代をせむること、一同上に付、国元へ早打遣のこと、一土州英人下向も、幕策露顕のこと、一野宮（定功）勅使下坂のこと、一其内後藤、壮士を率被上京のこと、一同上之上手筈のこと、一幕策も有之候故、断然策とのこと

中御門談話のこの部分の情報源は、薩摩を「国元」と呼ぶ表現、また、秘密である薩土盟約の内容を知っていることより、薩摩倒幕派、しかもその中枢部であつたろう。ではそれは誰か。

八月中旬、薩摩側はこれまで滞京していた久光を下坂させることにした。これに不安を感じた中御門は、その理由を聞くため面会を求める書簡を一日、二〇日と大久保に送っている（『大久保利通文書』〈立〉五、五頁）。そしてすぐ後でひく九月一〇日付大久保宛中御門書簡（同書、六頁）で、中御門への大久保の「内話」が言及されており、この間に大久保と中御門の会議が行われていることが明らかとなる。これより考えて、右の情報源は大久保の可能性が高いように思われる。そうなると二〇日から三〇日の間に「内話」が行われ、その内容を中御門が正親町三条に伝えたのを記したのが右の記事であるということになる。

そしてこの中御門の情報で何よりも注意すべきは、傍線部の「断然策」である。この段階で打つべき策とは、建白の提出か、即時挙兵しかないが、「断然策」という表現より後者の可能性の方が高いだろう。この点をさらに前述の九月一〇日付の大久保宛の中御門書簡に確認しよう。

一昨日正三卿（正親町三条）より書中「大久保が」御伝言之趣被申越承知候、扱隅州殿（久光）御所旁兎角同様にて一先御帰国、為御名代備後（島津備後）之旨、扱々無是非事嘸々御心労之事と存候、乍去方今不容易時勢兼「大久保が」御内話之辺もケ様に遷延にては如何と日夜苦心致居候処、土州後藤已下過日上坂不日京着之趣伝承、今度は急度決議も

可有之と相樂居候折柄、隅州殿御帰国之旨承、実に驚愕之至り候、御名代上京且隅州殿御趣意は貫徹有之旨も承候得共、又々右往反日数も有之遷延に可相成義如何と深苦慮之事に候。所謂兵は崇神速と申義、又密策敵機速棄其利疾撃其不意と、尚將疾撃其不意に有之候事と存候間、一日早く決議大挙企望に候

九月八日、大久保は正親町三条を訪れ、八月半ばまで滞坂していた久光が帰国する事情について等の説明を行った（『嵯峨手記』同日）。このとき大久保はそれを中御門に伝言するよう正親町三条に依頼した。書簡冒頭「一昨日正三卿（正親町三条）より書中御伝言之趣被申越承知候」とはそれをさす。そして久光の帰国を告げる大久保の伝言に対して、「兼」「大久保が」「御内話之辺」の速やかな実行を中御門が迫っているのがこの書簡である。

ではこの「内話」の内容とはいかなるものか。それは現在、「ケ様に遷延」しているもので、後藤の到着により「今度は急度決議も可有之と相樂居」ものであり、「一日早く決議大挙」が「企望」されるものである。それは大政奉還建白か即時挙兵かの何れかと見ていいだろう。そしてそれは後者、即時挙兵であつたと思われる。なぜなら大政奉還ならあらためて「決議」の必要はないし、「兵は崇神速と申義」・「將疾撃其不意」とは即時挙兵にこそふさわしい文句だからである。つまり、大久保は中御門に後藤到着後に即時挙兵を行うという方針を「内話」していたと思われるのである。このことより八月三日の「嵯峨手記」が記す「断然策」とは即時挙兵と見ることができよう。

薩摩倒幕派は八月一四日から三〇日までの間に即時挙兵方針へ転換し、その意向を公家倒幕派に語っていたのである。

ではこの転換の要因は何だつたろうか。九月七日に西郷が後藤の説明した理由は、「後藤之議論は口には言へくして、被行かたき事也、兎角、六ヶ敷を云ふより早く事を起し候方、埒明き也」というものであつた（『寺村日記』、三四頁）。つまり、建白↓拒絶↓挙兵という後藤のシナリオは実際には実行困難であり、即時挙兵の方がよい、である。ここに見られるのは挙兵への焦りである。このとき薩摩側は一日も早い挙兵を望んでいた。この七日の会談ではほぼ二週間後、二〇日までに

は兵を挙げると西郷は語っていた(同)。一六日、長州へ挙兵の協議におもむく途中の大久保は九月中に事を挙げるべきと⁽¹⁶⁾していた。ここまで厳しい日程を考えているなら、幕府側に時間かせぎの余地をあたえ建白構想はたしかに埒の明かないものと言えよう。

八月一四日にはまだ建白を行うつもりであった薩摩倒幕派がにわかに挙兵を焦りだしたのはなぜだろうか。「京地切迫之事情汲受、此上は片時早目揚旗候処急務」、と大久保が記しているところより、京都の情勢が切迫しているという彼らの判断がその要因である。この「京地切迫」とは何か。先にひいた八月三〇日の「嵯峨手記」の「幕策も有之候故、断然策とのこと」という記述より推測するなら、幕府側の対抗策ということになる。「嵯峨手記」が記すところの幕策とは、非常時には天皇を彦根に移そうとの準備、外国を利用しての牽制であった。こうした幕策が本当に行われたのかは不明だが、薩摩倒幕派はそうに見たのである。すでに述べたように、薩摩の挙兵計画の核は奇襲である。しかし現実には挙兵は遷延し、噂は広まり奇襲の成否は微妙になりつつある、そうしたなか、幕府側が対抗策をとりつつあるという情報が八月の後半に薩摩側に入り、それが決定的な契機となって薩摩倒幕派は即時挙兵を決意したのではないだろうか。

しかし、このように焦っていないながら、彼らはなぜ後藤を待ったのだろうか。ここで第一の疑問があらためて浮かび上がる。中御門ではないが、兵は神速を崇ぶ、そして幕府の警戒が日々強まるかもしれないに、なぜ待つのか。この疑問への解答となるのは、先の「嵯峨手記」の以下の記述である。「一其内後藤、壮士を率被上京のこと、一同上之上「挙兵の」手筈のこと」。「断然策」Ⅱ即時挙兵は、後藤が連れて来るであろう兵力を加えて手筈が立てられることになっていたのであり、彼らが後藤に期待したのは彼が連れて来るであろう兵力(「壮士」)だったのである。事実、九月三日、上坂した後藤との会談の冒頭で西郷が聞いたのは、土佐の出兵のことであった(「寺村手記」、四八〇頁)。

土佐の兵力は幕府側の警備の強化を甘受しても待つ価値があったのである。もちろんせっかく待っても、上京した後藤が

即時挙兵に反対するかもしれない。そのときはどうするつもりだったのか。これについて手掛かりとなる史料はなく、また土佐の兵力数など具体的条件により変わる話であろうが、その場合はおそらく盟約通り建白を行うつもりだったと思われる。土佐の兵力が加われば、建白を行い慶喜の出方を待つという時間的余裕も出てくるし、逆に、土佐の意向に逆らい盟約を一方的に破った場合、土佐の軍事力がどのように動くか不気味なものとなるからである。

しかし、約束と期待に反し、土佐兵は来なかった。このことへの失望の大きさは、後藤の帰京直後、土佐の脱藩浪士の一入で、岩倉周辺にいた大橋慎三（勘蔵）の以下のような岩倉宛書簡（九月一〇日付岩倉宛大橋書簡、『岩倉具視関係文書』（憲）二五三）に見ることが出来る。

後藤象二郎過日着仕候処、国論戦争に難決復古之周旋に出、案大に違ひ、赤面之至に御座候、故に人数は出不申、甚入組子細有之、然に是非共出させ申含に罷在候。

そして後藤上京後と土佐と薩摩側での会談でも出兵問題が中心論題となっていた。九月中旬に長州におもむいた大久保は以下のように事態の説明を行っている（『柏村日記』、『防長回天史』五篇下、三六〇頁）。

土藩後藤象次郎出京、先達同氏建策帰国の上、尽力仕候へ共、一藩の公論と不相成、いつく迄も舌戦の積りに付、右にては薩論と不合に付、薩一手にて決策通可及一挙と「薩摩側が後藤に」申切候処、象次郎「が言うには」尚在京同藩人はいづれも「薩摩に」協力可致との事にて、「土佐」国元へも人数被差登申候様「後藤が」申遣候得共、屹度罷登り候程は難計由。

家近氏が指摘しているように容堂は将来の出兵を否定したわけではなく（家近前掲書、二〇五頁）、ここで後藤が語っている「いつく迄も舌戦」とは建白活動に限定した不出兵であり、「一藩の公論」とならなかったと後藤が述べるものは、京都への即時出兵である。つまりここで議論の焦点となっていたのは、後藤の不帯兵だったのである。

すでに述べたように後藤は兵力を伴い帰京するつもりであった。建白をのませるには軍事的圧力が必要と考えていたのである。しかし説得に兵力を伴わせるべきではないという容堂の反対でこれは流れた。土佐の違約である。しかし、土佐側はこれがここまで大きな意味を持つことになるとは思っていなかった。土佐の由比猪内がこれについて、「君公暫時の御深慮を以、出兵せずと〔薩摩側に〕いへは、些不都合なりにこと足り可申歟」と述べていることはすでに指摘されている（家近前掲書、二〇六頁）。また、八月二〇日、長崎で土佐の坂本竜馬・佐佐木高行と木戸孝允が会談しており、木戸はここで初めて、建白↓拒絶↓挙兵という薩土盟約のシナリオを聞かされたものと思われる⁽¹⁸⁾。そして翌日の竜馬宛木戸書簡（『木戸孝允文書』〈史〉二、三〇七頁）より判断すると、ここで話された計画では土佐の出兵は建白の後になされることになってい⁽¹⁹⁾た。木戸のみならず竜馬も佐佐木もこの段階では挙兵論者であり、「建白芝居」は「砲撃芝居」の手順に過ぎなかった。その彼らにとって後藤の不帯兵はシナリオに支障を来すようなものとは意識されていなかったのである⁽²⁰⁾。

帯兵問題の意味付けになぜこのように大きな差が生じたのか。最初、七月にそれが約束された段階での意志疎通があるいは不十分だったのかもしれないが、主因は、挙兵を急ぐようになった京都側においてこの問題の比重が高まっていたことにあるだろう。

帰京した後藤はこの問題の大きさを知った⁽²¹⁾。その結果、右の「柏村日記」の傍線部にあるように、後藤は、現在、国元に兵を出すよう言い送っていると薩摩側に語ることになった⁽²²⁾。この召兵論は単に名誉挽回の意図だけではなく、必ず出兵するので直ちに挙兵するのは控えてほしい、という薩摩への牽制の意図もこめられていただろう。しかし、散々待たせた上、不帯兵で上京した後藤がさらに出兵を約束したとしても、とても信用できるものではなかったろう。しかも「屹度罷登り候程は難計」とあるようにその成否については後藤自身、保証しているわけではないのである。

こうなると土佐の出兵など待つわけにいかず一日も早い挙兵が望まれ、もはや大政奉還を建白するという手順をいれる余

裕はない。また、不帯兵は土佐側の違約であり、盟約破棄を行っても薩摩側の一方的違約となるわけではなかった。この結果、薩摩倒幕派は「返約」を通告したものと思われる。つまり、薩摩倒幕派は八月後半に即時挙兵論を望むようになっていたが、それを決断したのは九月に入り後藤の不帯兵上坂が判明したときだったのである。

(2) 分裂以後

このように薩土の路線は分裂した。しかしこの分裂で両者が絶縁状態になったわけではない。相互の緊密な接触はなお続くのである。薩摩倒幕派にとって土佐は予想される内戦において有力な味方として期待する存在であり、粗略に扱えるものではなく、九月七日の変心以後も土佐側に対して一定の重要情報は流し続けていた。⁽²³⁾しかし同時に牽制も行っていた。一

○日の土佐側との会談では西郷は建白は自由に出せばよいと言いつつ放った(『寺村日記』、三五頁)。しかし、二三日、提出についてあらためて土佐側から相談があったときに西郷は、提出は幕府の警戒を促すのでやめてほしい、もし出すならその翌日に挙兵するので前日までにかならずそれを知らせるように、と強烈な牽制を加えた(同書、三九頁)。建白は薩摩倒幕派にとつて望ましいものではなかったのである。しかしそれはあくまで幕府の警戒を招き目前に迫った挙兵の妨害になるといふ一点においてであり、建白が即時挙兵ではないが、挙兵へのもう一つの道であることは薩摩にとつて変わらなかった。⁽²⁴⁾

一方、土佐にとつて薩摩は、内戦を回避するためには、その即時挙兵を思いとどまるよう説得しなければならない相手であった。そのため薩摩藩邸内部の非倒幕派に工作する⁽²⁵⁾という薩摩倒幕派の目から見れば背信的行為をも行っていた。しかしそうではあっても、挙兵を積極的に妨害しようとしているわけではなかった。王政復古クーデターのさいと異なり、この時は、挙兵について知らされた情報を土佐側が徳川方に内報した形跡は管見のかぎり見あたらない。また、土佐側が建白の提出を伸ばしたのは、単に西郷に牽制されたからではなく、挙兵の妨害となつてはいけな⁽²⁶⁾いとの自主的な配慮も存在してい

たのである（『寺村手記』、四八五頁）。

九月一日、後藤は薩摩側におもむき説得に及んだが、結局物別れに終わる。その別れ際、後藤は薩摩側に「根元国是を振起致度と申所は御同意之訳に付、貴藩之御拳兵一条に於て決て御妨は致不申」と述べ、薩摩側も「大慶之模様にて、尚以後互に可申段旨申述熟談にて相分候」（『寺村手記』、四八二頁）ということになったが、それは単なる社交辞令ではなかったのである。

しかし建白提出は内戦を回避する可能性をもつものであるとともに、土佐の国論であり、なんとしても出さねばならないものであった（『寺村日記』、三七頁）。さらに九月二〇日、幕府大目付の永井尚志は後藤と会談し、その席で建白提出を促した（同書、三九頁）。幕府内に賛同者がいることが判明し、受諾の可能性がいくらかは高まってきたのである。そこで二四日以降、後藤は薩摩倒幕派の了承を求めるべく必死の説得活動を行った⁽²⁶⁾。二七日、薩摩側はこれを了承することを決定（『大久保日記』、二九日にはその旨の返答を行った模様である⁽²⁷⁾。大久保が長州で取り決めた第一次出兵協定（『大久保利通文書』〈史〉、五〇一頁）では九月末には兵船が兵庫沖に到着することになっており、拳兵は翌三〇日もしくは翌々日に行われるはずであり、もはや提出しても支障はないと判断したのだろう。

しかし薩摩倒幕派の目論見は外れた。九月末になっても国元からの兵船は現れなかった、さらに拳兵計画に加わっていた安芸の動揺が発生する、そしてその動揺をおさめた直後の一〇月九日、薩長の国元が上方への兵力派遣を中止した（失機改図）との情報が入った。こうした動揺のなかで拳兵に向けた新たな方策として考案されたのが討幕の密勅である。討幕の密勅はいったん国元に伝えられるものであり、そうである以上、それが想定する拳兵計画は、即時のものではなく、将来を期したものであった（以上、拙稿A論文、一章、参照）。こうなると即時拳兵と大政奉還建白の矛盾も消失し、残るのは共通性のみとなる。一〇月一日に小松が後藤に対して建白を拒否したときは薩摩は本国より拳兵するが、その時はもちろん土

佐も出るのだろう、との内談を行う所以である。⁽²⁸⁾

一方、土佐は一〇月三日ついに大政奉還建白の提出を行った。そして以後、状況は緊迫しているので至急回答するよう、幕府に迫った。薩摩の挙兵の動きを意識したものである。九日、永井より建白採用を決定したとの通知が来た（以上、「神山日記」）。建白採用はこれで明らかとなった。しかしこれで問題が決着したわけではない。いかなる形での採用か、真の奉還なのか、名前のみで実権はなお手中に置こうとするものなのか、決定の実態がなお不分明であったからである。一〇月一二日、幕府より在京諸藩に対し翌日、二条城に登城するようとの召集命令が出た。一三日、登城する後藤に竜馬は書簡（『坂本竜馬関係文書』〈史〉一、四一九頁）を送っている。

御相談被遣候建白之儀、万一行はれされは固より必死の御覚悟故、「後藤が」御下城無之時は、海援隊一手を以て大樹参 内の道路に待受、社稷の為、不戴天の讐を報し、事の成否に論なく先生〔後藤〕に地下に御面会仕候。○草案中に一切政刑を挙て朝廷に帰還し云々、此一句他日幕府よりの謝表中に万一遺漏有之歟、或は此一句之前後を交錯し、政刑を帰還するの実行を阻障せしむるか、従来上件は鎌倉以来武門に帰せる大権を解かしむる之重事なれば、幕府に於てはいかにも難断の儀なり。是故に営中ママ―原文の儀論の目的、唯此一款にあり。万一、先生一身失策の為に天下の大機会を失せば、其罪天地に容るへからず。果して然らば小弟亦薩長二藩の督責を免れず。豈徒に天地の間に立へけんや。

この書簡が問題としているのは、慶喜が建白を容認することを知った上で、その内容が真の奉還か偽りかである。竜馬がその基準とするものは、「一切政刑を挙て朝廷に帰還し」云々の字句が慶喜の朝廷への上表（大政奉還をうけいれた以上、それを朝廷に上表することになるはずである）にふくまれるか、ふくまれていても実現困難な形になっていないか、である。そして今日の二条城への召集はそれを議するためのものであると判断し、その場でけっして誤ることのないよう後藤に念を押ししたのがこの書簡である。そして後藤がその論に固執するときはあるいは殺されるかもしれないが、そのときは慶喜を襲

撃し恨みはかならず晴らすと述べ、後藤の決意を促したのである。建白容認の意向が判明しても、それが真のものかについては竜馬はけつして樂觀していなかったのである。

これへの返書（同書、四一九頁）で後藤は、以下のように記している。

華書拝披、於僕万々謝領す。文中政度を朝廷に帰還云々之不被行時は勿論生還する之心無御座候。併今日之形勢に因り、或は後日挙兵之事を謀り、飄然として下城致哉も不被計候得共、多分以死廷論する之心事、若僕死後援隊一手云々は、君之見時機投之に任す。妄輕挙勿破事、已に登營程度に迫れり。大意書之。奉答頓首。

傍線部のような留保を付しているところは、いかにも後藤らしいが、彼が決死の覚悟であり、慶喜の意図が真の奉還ではない場合は、土佐は挙兵せざるをえないと考えていたことは事実だろう。拒絶↓挙兵のシナリオは後藤のものでもあったのである。

二. 諸侯会議即時招集構想対薩摩クーデター構想

1. 諸侯会議即時招集構想の登場

一〇月一三日、慶喜の行った大政奉還の意向表明は、竜馬の危惧するような偽りのものではなく、政権の朝廷への帰一を述べる真の奉還であった。これはまさに後藤の望むものであり、慶喜に対する後藤の評価は一気に上がった。そして春嶽や尾張の徳川慶勝など「公議政体派」諸侯も次第に慶喜を信用するようになり、彼を中核に天皇・公議政体を構想するようになった。一方、薩摩倒幕派にとっても大政奉還は歓迎すべき事態であり、西郷・大久保とならぶその最高幹部で、家老の小

松は後藤や安芸の辻将曹と協力し、大政奉還の実質化にむけて尽力することになる。しかし、薩摩倒幕派の反応はこれのみではなく、西郷や大久保はなお慶喜を疑っていた。一〇月一七日、小松・西郷・大久保はいったん離京し、国元に向かった。出立にあたり小松は後藤と今後の新政体づくりにむけての協力を約束していた（以上、拙稿B論文、I章二節2）。大政奉還上表は新政体移行のために諸侯会議の開催を予定していた。しかし、朝廷よりの召命にもかかわらず諸侯は上京してこなかった。政局は不安定な停滞状態となった。

こうしたなか、一月二五日、島津茂久が大兵を率いて上京してきたが、この一行には小松はふくまれていなかった。当時の政界の一般的理解では、薩摩指導部は、強硬論者の西郷・大久保と穏健論者の小松に分かれているとされていた。当然、後藤は小松を期待し、西郷・大久保を警戒した。そして小松の不在を後藤は、小松の平和路線が敗北した現れと見、危機感をもった。その結果、後藤は、薩摩が強硬路線に出る前に、早急に新政体を樹立する必要があると考えるようになり、新たな構想を打ち出すことになったのである。

後藤の構想とは、諸侯会議を待たずに直ちに新政体を樹立しようというものであった。在京諸侯のみの諸侯会議を即時開催、そこで大体の方針を決定し、次に簾前誓約を行い、そのうえで議事院を設置するというものであった。後藤はこの構想を一月二五日、越前の松平春嶽に説き、その賛成を得た。そして土佐・越前は以後、これの実現に向けて動き、二七日までには、尾張・肥後・安芸さらには慶喜の腹心の永井尚志の合意を得た。雄藩から徳川改革派まで、諸侯会議即時招集構想は急速にその支持を広げていったのである。そしてこの構想で注意すべきことは、それが薩摩をも働きかけの対象としていたことであった。後藤・福岡は二八日、西郷を訪れ、その構想を説いている。⁽²⁹⁾ 諸侯会議即時開催を既定事実化することで、薩摩に先手を取りその動きを封じ込めることを目指していたと言えよう（以上、拙稿B論文、二三頁）。後藤のこの構想の実現には公家側の協力者が必要となる。そして彼が期待したのは二条摂政ではなく、公家倒幕派の正親町三条であった。

後藤が警戒した薩摩の方針とはいかなるものであったろうか。国元にもどった薩摩倒幕派指導部は、今後の方針を決定したが、それは小松ではなく、西郷・大久保の考えによるもので、大政奉還前と同じく、挙兵方針であった。そして茂久一行は上京の途中、長州によりそこで第二次出兵協定を結ぶ。それが想定する挙兵計画は、二つの部分よりなっており、第一は、御所を軍事的に制圧しての新政体の強行樹立、第二はそれと同時の上方の徳川方拠点への先制攻撃であった。こうした攻撃を行う以上、全国的内乱は不可避であった。西郷・大久保がこうした策を主張したのは、大政奉還が慶喜の真意か疑ったからであった（以上拙稿B論文、一五―一七頁）。この時の彼らの目的は、C型倒幕論とみなせよう（もつとも大政奉還により幕府はなくなることになっており、倒幕論の用語をなお用いるのはいささか不適切だが）。しかし、帰京した彼らは、公家倒幕派の意向（見合わせ沙汰書）や薩摩京都藩邸の慶喜への高い評価を知り、方針を修正する。すなわち、計画の第二部分の削除で、これにより計画は、第一の部分、御所制圧、新政体の強行樹立のみとなった。軍事クーデターである王政復古クーデター構想の原形がここに成立したのである。徳川拠点への先制攻撃が消えたため内戦に発展するかいなかは慶喜の出方に任されることになった（以上、拙稿B論文、一六―一八頁）。薩摩の構想においては、クーデターに「公議政体派」諸藩を参加させることになっていた。薩摩の政体構想も天皇・公議政体論であり、当然、新政府の発足に際しては、雄藩である「公議政体派」諸侯の参加が必要だからである。その対象となる藩は、土佐・越前・安芸・尾張などであった。

二五日以降、後藤と薩摩、二つの構想のつばぜり合いとなった。双方とも自己の構想に相手を組み込もうと望んでいた。そして競合の帰趨を決する場となったのが、公家倒幕派であった。

2. 公家倒幕派——中山構想の挫折——

正親町三条・中山・中御門・岩倉具視ら四名の公家倒幕派は、慶応三年、武力倒幕なくしては王政復古は不可能と判断、

武力倒幕路線をとる薩摩と提携した。そしてそうした共謀関係の中から出されたのが、一〇月一三、一四日の討幕の密勅であった。しかし、大政奉還が行われ、平和的に新政体が樹立される見通しが出てくると、彼らは方針を変更し、討幕の見合わせを命じる沙汰書を一〇月二一日に作成した。そして大政奉還以後の情勢のなか、公家倒幕派の足並みは乱れてくる。大政奉還構想を高く評価する点では彼らは一致していたが、それが慶喜の真意であるか、内心は大政再委任を狙っているのではないか、この判断をめぐって、中山・正親町三条は慶喜を信用し、岩倉・中御門はなお疑い続けたのである。(以上拙稿A論文、三三頁・四〇頁註⑦)。

一月一五日、大久保は帰京、翌日、公家倒幕派より見合わせ沙汰書を知られ、これにしたがう旨を返答した。これが大きな要因となって、第二次出兵協定の計画である、上方徳川拠点への攻撃が削られたのはすでに述べたところである。そして二五日、薩摩は御所制圧のみの新計画を決定したが、この計画は翌日、岩倉に知らされた(『大久保日記』)。そしてこれについて、以下で述べるように岩倉・中御門はただちに賛成したが、中山・正親町三条は容易に応じず、岩倉や大久保の度々の説得により一二月一日ようやくそれに合意したのである。

そして注意すべきことは、中山・正親町三条は単に薩摩の構想に躊躇していただけではなく、それとは別の新政体樹立構想を持っていたことである。したがって、中山らへの説得は両構想の優劣論となった。中山らの構想はいかなるものであったのか。それを示すのが、一月二九日の「嵯峨手記」(三九、四〇頁)である。

一向固(中山)家、固対(岩倉)同席談、一段々利害得失等、議論有之候へ共、つまりは早々尾以下より、摂政へ建白有之、其旨以写両役へ届来に付、両役より摂政へ申出、退役申立瓦解、其挙に固、十分尽力可有之、若右不被行は、如組立可計申約候

二七日以降、大久保や岩倉により中山・正親町三条への説得工作が行われており、この二九日の記事が記す、中山・正親

町三条と岩倉の会談もその一環である。そしてその結論は、「つまりは」以下の部分であるが、それは、傍線部「早々尾以下：可有之」の前段と、傍点部「若右不被行は、如組立可計申約候」の後段よりなっている。前段の方策が実行できないときは、後段の方策に出る、というのが議論の結論というのである。そして後段の「組立」とは薩摩のクーデター計画である。⁽³¹⁾

そして前段が中山の構想であるが、それはいかなるものであつたろうか。これを解釈するには、まず尾張以下の摂政への建白とは何かが問題となるが、建白を摂政へ提出↓「退役申立」（これは摂政・議奏・伝奏以下の朝廷の現当局者の退役を申し立てる、ということだろう）↓瓦解、という流れより考えると、それは朝廷現当局者の退役論と見るべきだろう。一月一五日、摂政は慶喜・慶勝・春嶽に王政復古にさいし「朝廷の綱紀何辺一途に奉置候見込に有之候哉」という国政全般についての策問を下しており（太政官編『復古記』、一九三〇年、一、一二三頁）、尾張はそうした建白をなしうる、そしてそれを期待される立場にいたのである。⁽³²⁾ となると中山構想とは、尾張以下雄藩の建白を圧力にして現朝廷指導部を追い落とし、それを機に新政体の樹立を行おうとするものであったと見る事が出来よう。このことは、前日、二八日の「嵯峨手記」よりも推定することができる。

一固（中山）談、一四冊の内、二冊相伝置候、一辞大臣に付、其挙に事を行のこと、一対（岩倉）内々面談のこと、一予（正親町三条）一応退役、更被召は、其上は出仕、名義正のこと

冒頭の四冊とは、薩摩のクーデター計画案である。したがって、以下はクーデター問題をめぐる中山の談話ということになる。次に「辞大臣に付、其挙に事を行のこと」とあるが、「事」とは、新政体の発足⇨王政復古と解することが出来、この部分は、大臣の辞任（現朝廷当局者の辞任）を機会に「事」⇨王政復古を行う、と見る事が出来よう（この「辞大臣」が、先に引いた二九日の条の現朝廷当局者全体の辞任にあたることは、最後の「予一応退役」云々よりも推定することができる。このとき正親町三条は議奏で当局者の一員であつたのである）。

公家倒幕派にとって王政復古とは、幕府政治の廃止とともに、朝廷内における伝統的支配秩序、摂関家を中核とする支配秩序の打倒をも意味していた。そして一月二四日には近衛左府・一条右府も辞表を提出し、現指導部は瓦解の道を歩みはじめていた（前掲『復古記』一、一六三頁）。そして、「左右大臣も御辞表相成、於関白も御同様之思召故、其上此手順通相運候得は、漸を以成し居合も可然」（『大久保日記』、二三四頁）との中山もしくは正親町三条の大久保への二九日の発言にあるように、彼らは二条摂政も辞任の意があると判断しており、こうした状況のなか、尾張以下の建白を期とする摂政の追い落としによって新政体の平和的樹立は可能であると中山は考えていたのである。⁽³³⁾

この中山構想と薩摩の構想とは対抗する性格のものであった。第一に、薩摩の案が軍事クーデターであるのに対し、これは摂政を辞任におこむ一種のクーデターであったが、あくまで非軍事的な、いわば平和的なそれであること。第二に、薩摩の案が、権力抗争面で慶喜に打撃を与えるものであるのに対し、尾張のみではなく、越前・安芸・土佐など「公議政体派」の雄藩の広範な結集による新政権樹立を考える中山案はそうした反慶喜的性格を持っていないことである。（以上、拙稿B論文、二二頁）

このように一月下旬、公家倒幕派の新政体樹立構想は、薩摩案を支持する岩倉・中御門、別の構想を持つ中山・正親町三条とに分裂したのである。そして四人のうち、中山は天皇の外祖父、正親町三条は議奏であり、薩摩にとり彼らの賛同が絶対に必要で、大久保による必死の説得工作が続く。一月二九日、大久保は正親町三条と会談、ついにその会得を得たと考えた（『大久保日記』）。しかし、正親町三条は大久保と会談の後、中山・岩倉と会談すると、また動揺し、先に引いた一月二九日の「嵯峨手記」の結論となる。つまり、まず中山構想にしたがって新政体樹立を目指し、それが実現できないときは、薩摩案（「組立」）を行う、である。岩倉がいながら結論が逆転したことは、中山・正親町三条の逡巡の強さを示していると言えよう。

もちろんこうした結論には薩摩は不服であり、一二月一日、大久保は中山を訪れ、議論数刻に及んだ。この結果、ついに中山は納得し、正親町三条とともにそれに協力する旨を返答した。そしてその上で大久保・西郷は後藤にクーデターをもちかけることにしたのである（『大久保日記』）。

3. 諸侯会議即時招集構想の敗北

一二月二日、西郷・大久保より薩摩の計画は後藤に伝えられた。大久保は、後藤は「大いに雷同」したと見た（『大久保日記』）が、実際は異なり、後藤は内心これに反対であった（拙稿B論文、二四頁）。しかしそれにもかかわらず、後藤は薩摩の計画に賛成し、これに参画することにしたのである。なぜそう後藤はしたのだろうか。

その理由は、公家倒幕派の動向であつたと思われる。「神山日記」（一二月二日）は薩摩の後藤への働きかけについて以下のように記している。

今日西郷・大久保兩人後藤へ逢に來所、中山卿・中御門・正三卿・岩倉入道卿の御内命とて、此度摂政并両議都て廢し、有栖川宮を太政官政務総宰 議定 公武取交人物を任す、尾越薩土下院 議定の参与へ後藤輩云々
如此薩より疾く先し押立候。然に我公（容堂）御日延にて來る五日御国を御立故、何分右御発頭御差延被下度旨後藤より引合、漸來る九日迄は延候筈に再大久保より答有之由

つまり、薩摩は公家倒幕派の意向として自らの計画を示したのである。もちろん、土佐側は傍点部にあるように、実際は薩摩の計画であることは知っていた。しかし、抱き込むべき相手を先に握られてしまったことは事実であり、薩摩に先んじられた（「如此薩より疾く先し押立候」と神山が記す所以である）。

本来、中山の構想は、薩摩ではなく後藤の構想と親近性のあるものであつた。ともに新政体の平和的樹立をめざすとともに

に、雄藩の広範な結集により慶喜もふくむ新政体を目指していたからである。しかし結果は、両構想の合体とはならず、中山らは薩摩の計画に賛同した。

こうしたねじれた結果となったのは、薩土両者の公卿への働きかけの違いが大きかったと思われる。大久保は二六日に岩倉に入説して以降、連日のように公家倒幕派への説得を行つてゐる（『大久保日記』）。一方、土佐は、正親町三条に入説するつもりであると二五日、後藤が春嶽に語つてゐる（『丁卯日記』、二四三頁）が、『嵯峨手記』『嵯峨実愛日記』（史）二を見るに二五日以降、実際に土佐側が彼に接触した様子はない。また、そうした接触を示す他の一次史料も管見の限り見あたらない。薩摩に対する土佐の立ち後れは否めない⁽³⁴⁾。当代一の寝業師の後藤が大久保と対抗して説得に動いていれば、もともと構想が親近していることもあり、中山・正親町三条が諸侯会議即時召集構想に賛同した可能性もあったのではないだろうか。

なぜこのように立ち後れたのだろうか。その要因には、ここに至るまでの公家倒幕派との人間関係の濃淡がまずあるだろう。後藤と公家倒幕派とはもちろん関係はあったが、討幕の密勅策動を共謀するほどの薩摩との密接さとは比べものにならない⁽³⁵⁾。さらにそれぞれの構想実現に向けての戦術の差も要因としてあった。二五日、その構想を春嶽に説明するにあたり後藤は、正親町三条に入説すると語りながら、公卿については「外より入説に動揺之癖有之」と突き放した見方を述べた（『丁卯日記』、二四三頁）。そして、こうした動揺を防ぐために「同盟藩多勢之力を以正説を先入固結」する必要がある、そのために一藩でも同論が多い方が、力も強く説得も出来ると述べた。まず雄藩の間での合意を固めたうえで公卿側を説得すべきというのである。そして精力的に雄藩、さらには徳川方に遊説したのはすでに述べたとおりだが、逆に対公卿工作は後回しになってしまった。一方、薩摩は最終的には雄藩を仲間とするつもりだったが、その説得は決行の直前（前々日）にす⁽³⁶⁾る積もりであり、当面は公家工作に集中した。朝廷工作が不可欠なクーデター構想において、要の位置にあったのは、公

家倒幕派であり、後藤は戦術を誤ったようである。⁽³⁷⁾

もともと公家倒幕派が薩摩に合意したことで、後藤の構想が実現できなくなったとしても、あくまでクーデターに反対する、あるいは参画を拒むという選択も後藤にありえないわけではなかった。しかし反対したとしても、薩摩の決意は固くとも方針を変えるとは思われない。そうであれば、クーデターに参画し、その計画を慶喜が受け入れ可能なものに極力修正し、それにより内戦を回避し、平和的に新政体樹立につとめ、そのうえで慶喜の政治的復権をはかることが次善の策となるのである。

そして薩摩のクーデター構想もこの段階では後藤が参画可能なものに変化していたのである。もしクーデターが徳川勢力への先制攻撃をふくむものであったら、後藤はこれに参画しえなかったろう。しかし、既述の通り計画のその部分は、公家倒幕派の意向などにより二日の段階ですでに削除されていたのである。こうなるとクーデターが内戦となるか否かは慶喜の出方次第ということになる。ここに後藤の活動の余地があったのである。後藤の「雷同」の背景にはこうした考慮があったのである。

付論 勅命と薩摩軍事力——遠山説の検討——

なぜ「公議政体派」が薩摩のクーデター参画に参画したのか。以上、これについての私見を述べた。順序は逆になるが、先行研究を見ることにする。この問題については、遠山前掲『明治維新』が論じているが、それ以後、ほとんど検討は行われてこなかったように思われる。しかし最近になり井上勲・家近・原口氏らの新説が登場するようになった。⁽³⁸⁾このうち長く定説的位置をしめ、また他の重要な論点にふれている遠山氏の見解についてここで検討することにする。

遠山『明治維新』は以下のように述べる。越前・土佐が心中反対ながらクーデターに参画するという「奇怪」な行動をと

ったのは、「第一に薩藩の在京兵力に圧せられたからで、第二に随意「宸断」を引き出しうる薩州に逆うならば、朝敵となるであろうことを恐れたからであつた。誰もがこの政治的危機の極点にあつて、いかにして自藩の運命を保全するか、政局がどちらの側に転ぼうとも、常に自藩を一枚加えて置く万全の方策を講ずるに汲々としていた」（一〇〇頁）、と。遠山氏の論点は二つ、第一にこのとき「公議政体派」諸藩を動かしていたのは、いかに生き残るかという自藩第一主義であつたということ、第二は、強大な在京兵力をもつとともに、公家倒幕派を通して自由に「宸断」を操作できる薩摩に逆らえば朝敵として潰されてしまう恐れがあり、生き残りを望む後藤らは薩摩に雷同した、ということである。

この説は妥当だろうか。まず、第一の自藩第一主義については、後藤の行動がそうしたものでないことは、すでにこれまで論じたとおりである。次に第二の薩摩への恐怖について見る。「公議政体派」は本来に薩摩を恐れていたのだろうか。薩摩が恐れられていた根拠として遠山氏は、まず、自由に「宸断」を引き出しうることをあげる。たしかにこうした薩摩像は一見、自然に思える。しかし、それは我々後代の人間が討幕の密勅策動を知っているからである（ただし、公家倒幕派は薩摩の操り人形ではなく、こうした像自体、妥当なものではないことはすでに見たとおりである）。だが、同時代においてはこの策動は極秘であり、「公議政体派」はこれを知っていなかった。クーデター前、「公議政体派」がこうした不安を薩摩に對し持っていたとは思えないし、また、それを持っていたという根拠を氏は挙げていないのである。

そしてさらに考えれば、かりに薩摩が公家倒幕派を使い自由に宸断を出しえたとしても、その宸断は大きな限界を持たざるを得なかつたろう。なぜならば、それは摂政以下の当局者を通した正式なものではなく、討幕の密勅のように密勅の形になるはずであるが、そうした密勅については、それが本当に天皇の意志なのか、偽勅ではないのか、という疑惑を当然、免れないからである。もともと、文久三年の八・一八クーデター直後に孝明天皇が、尊攘派全盛時代に出した勅命を偽勅と否定して以来、勅命は絶対性を失い、その信憑性への疑いにさらされるようになっていた。ましてや、未成年の天皇の意思

なるものを、摂政以下の当局者ではなく、局外者が伝える密勅である。それがなぜ天皇の真意を伝えていると見なせるのか。この問いへの答えとなりうるのは、中山が天皇の外祖父であるという一点にすぎない。密勅は、それを真勅と扱いたい者、そのように扱うことが有利な者よりは真勅として扱われるだろうが、それ以外の者にまでそれを迫る力をもっているわけではなく、絶対的に畏怖すべき存在というわけではなかったのである。（この点については、王政復古クーデターのさいに出された密勅について次章二節1で具体的に見ることにする）。

もともと、薩摩による御所の制圧が確実であるなら、天皇の身柄を握ることができわけであり、以後は自由に正式な宸断を出せるように一見は見える。「公議政体派」はそうした事態を恐れていたのだろうか。しかし、これも考えにくいことである。なぜなら、薩摩による御所の制圧は次章で述べるように、成功が約束されたものでは決してなく、その妨害は「公議政体派」がその気になれば、容易になしうるものだったからである。

次に圧倒的な薩摩の在京兵力という像について見る。このときの在京薩兵力はたしかに強大で四千二百余と推定されている。そして一二月初旬には約七百名の長州兵力が山崎周辺まで進出していた。計五千余がクーデター派の兵力となる。⁽³⁹⁾しかし、一方、これに対抗する在京徳川兵力も有力で、「丁卯日記」一二月一日条では、幕兵五千、会津三千、桑名千五百と記されている。計九千五百。数的には徳川方が薩長兵力を凌駕していたのである。（なお幕府兵力が將軍慶喜のもと急速に西洋化が進められており、第二次長州征伐段階のそれではなかった）。この兵力比よりすれば、上方での戦いで薩摩がかならず勝利するとは予想することはできなかったろう。鳥羽伏見の戦い以後の全戊辰戦争を知っている我々後代の人間はどうしてもその結果に影響される。しかし、鳥羽伏見直前、一二月下旬の薩長間の軍事指導者の計画では、開戦直前、あるいは開戦と同時の天皇の遷幸が考えられていること⁽⁴⁰⁾に明らかなように、あのような戦局の帰趨は当初より予想されていたものではなかったのである。

圧倒的兵力をもち、自由に宸断を引き出しうる薩摩という像は成り立たなかった。我々は、クーデターにおける御所制圧の成功、鳥羽伏見以後の戊辰戦争における徳川軍の敗北を知っており、どうしてもそうした結果より過去を見てしまいがちである。結果論をのがれること。このことはなお維新政治史研究の留意点であると言えよう。

小括

大政奉還建白構想をにかけて中央政界に登場した時の後藤の政治方針は、第一に天皇・公議政体の樹立、第二に内戦の回避である。平和的な政体移行を説く大政奉還建白はまさにこの方針が具体化されたものであった。しかし、この建白構想は矛盾をふくむものでもあった。すなわち、慶喜が説得に応じなかったときはどうするか、である。そのときは挙兵せざるをえないというのが後藤の考えであり、容堂の方針でもあった。後藤は慶喜が応じる可能性はあると見ていた。しかしそれは不確実なものである。後藤の議論は自藩の存亡を賭ける危険な方策であったのである。そしてこの段階の後藤の倒幕論は大名としての徳川氏の存続を認めるB型であったが、新政体の事実上の中心に慶喜をおくことを目指すことまでは考えていなかった。また、慶喜が建白を拒絶し開戦となった場合は、その倒幕論はC型に移行する可能性を持つものであった。

薩摩倒幕派の政体論は「公議政体派」と同じく天皇・公議政体の樹立であった。彼らは四侯会議においてこれの平和的実現を目指したが、慶喜が強引に兵庫開港勅許をかちとったためそれへの希望を失い、軍事的手段の採用を決意した。しかし、それはあくまで手段であり、内乱自体が目的になったわけではなかった。挙兵決意までの薩摩倒幕派の倒幕論はB型であったが、決意後、C型に移行した。しかしそれは軍事力という手段に規定されたものであり、平和的に倒幕が達成できるならB型にもどる余地があった。

このような両者は慶応三年六月下旬、大政奉還建白をともに行うことを約束、薩土盟約を結んだ。建白↓拒絶↓挙兵が両者に共通するシナリオであり、両者の差は、薩摩倒幕派は拒否を確信し、後藤がそうではないという状況判断の差であった。

盟約段階では、建白は七月中になされることになっていた。しかし、国元に戻った後藤は一向に上京してこなかった。こうするなか、八月後半、薩摩側は、幕府側が挙兵への対応策を講じていると判断するようになり、即時挙兵を望むようになった。しかしなお後藤が伴うと約束した土佐兵力を期待し、後藤の帰京を待っていた。だが、九月二日上坂した後藤は兵力を伴っていないかった。ここに薩摩倒幕派は建白構想の放棄、「返約」を後藤に通告したのである。こうして両派は分裂することになった。しかし、この分裂は七月、遅くとも八月中旬までに後藤が帰京していれば、おそらく起こらなかったことである。そしてこの遅れは長崎イギリス人殺害事件といった偶然によって生じたものであった。九月における両派の分裂は決して不可避なものではなかった。

九月に両派は分裂した。しかし以後も両者は敵対関係となったわけではなく、幕府に対抗する同志であった。また薩摩にとつて建白は、即時ではないが、挙兵へのもう一つの道であり、薩長国元より兵力の派遣がないことが判明し、即時挙兵が不可能となると、これを組み込んだ挙兵計画をふたび構想するにいたるのである。

一〇月一三日の慶喜の大政奉還の表明は、後藤にとりまさに希望通りのものであり、以後、慶喜を実質的中心とする新政体の実現を目指すようになる。一方、薩摩倒幕派のこれへの対応は割れていた。小松は後藤と同じく慶喜を評価し、新政体の平和的移行に協力しようとした。しかし西郷・大久保はなお慶喜を疑った。一〇月一七日、小松・西郷・大久保は国元に発った。京都の薩摩藩邸は小松の線で動くが、国元では西郷・大久保の主張が勝利をしめ、あらためて慶喜打倒をめざす挙兵が決定された。

十一月二三日に大兵を伴って上京した島津茂久以下の一行に小松がいないのを知った後藤は、薩摩は挙兵を計画していると判断、それに先んじて新政体を樹立すべく、諸侯会議即時開催を構想した。この結果、薩摩と後藤の両構想の競合となった。そしてその勝敗の分かれ目であったのは、公家倒幕派の支持の獲得で、これに先んじた薩摩側に後藤は敗北した。この結果、十二月二日、薩摩側よりその計画への参画を求められたとき、後藤はこれを了承せざるをえなかった。ただこの段階で薩摩の計画は、上京前とそれ異なり、上方徳川拠点への先制攻撃の部分はなくなり、御所の軍事的制圧と慶喜抜きの新政権の強行樹立のみになっており、後藤にも受け入れ可能なものになっていた。後藤は、計画に参画することで、クーデターの内容を緩和し、慶喜がこれに反発して内戦となることを防ぐとともに、新政権発足後の慶喜の復権につとめることを意図していたのである。

こうした後藤の参加により、薩摩の計画がどのように修正され、いかに実施されたのかについては次章で見ることになる。

Ⅱ章 王政復古クーデター

前書

王政復古クーデターに参画した武家は薩摩藩と「公議政体派」四藩であった。クーデターにおける両者の力関係はいかな

るものであったのか、また、ここにおける正当性原理のありようはどのようなものであったのか。「はじめに」で述べたようにこの二つの問題は密接に関連しているが、まず後者の点から研究史を見てみよう。

王政復古クーデターが行われた慶応三年後半は、公議政体論が一般化した時期である。すなわち、公議による政治を実現するため全国議會を樹立し、それを国政の中核に置こうという公議政体論がこのとき政治社会を風靡していたのである。大政奉還建白はこの議論の典型である。そして、慶喜の大政奉還上表が一〇月一四日に勅許されたことにより、今後の政体を定める諸侯會議の開催が具体的な政治日程にのぼるにいたったのである。

クーデターはこうした中で行われた。しかしそれにもかかわらず、研究史で浮かび上がるクーデター像は、公議原理ではなく天皇原理が圧倒的なものである。すなわち、この問題においても戦後の維新史研究の出発点と言える遠山前掲『明治維新』は、このクーデターの背後にある政治意識について以下のように記しているのである。『玉を抱く』者が官軍、『玉を奪』われれば賊軍、政争の勝敗はまさにこの一点にかかると意識された。それは全く宮廷陰謀的な卑屈な政治意識のあらわれであった。志士はまた好んで『芝居』という表現を用いたという。：明治維新の低俗な権謀術数性の象徴であった」（一〇二頁）。こうしたクーデター像は、「はじめに」で述べた通説的な明治国家像（天皇による公議の圧倒）とまさに照応していると言えよう。⁽⁴⁾

そしてこうした天皇原理の評価は、クーデターの政治的主導権の評価とかかわっている。I章二節付論でふれたように、遠山『明治維新』は、「公議政体派」は薩摩への恐怖よりクーデターに参画したとしており、クーデターを薩摩倒幕派が圧倒的な主導権を行使したものと理解されているのである。

しかし、こうした主導権理解については、研究史において早くから有力な異説が存在している。原口前掲『戊辰戦争』である。クーデターは、武力倒幕派と「公議政体派」との対立と妥協の産物であり、合作クーデターであったというのが、同

書の主張である（五八―六〇頁）。倒幕派がクーデターの主導権を握っていたことは原口氏も認めており、通説との差異は、そのもとでのどの程度、「公議政体派」の意向が反映されているのか、単なる追従ではなく、合作クーデターとまで評価できるものなのか、にある。

この点についての原口『戊辰戦争』の論拠は二つある。一つは、公議政体を樹立するという政体構想においては、倒幕派も「公議政体派」も一致しており、公議政体の強行樹立策という、クーデターの性格の一面は、「公議政体派」も容認するものであったことである（五八頁）。もう一つは、権力抗争における倒幕派の「譲歩ないし失敗」の存在。クーデターには、慶喜への政治的打撃という権力抗争の側面があり、この面では、倒幕派は「公議政体派」を押しきり、慶喜への辞官納地要求を決定した。しかし、その方式は天降りの宸断による命令ではなく、尾越よりこれを内諭し自主的に申し出させるという内諭周旋方式となった。これは倒幕派の「譲歩ないし失敗」であったと氏はするのである（五九、六〇頁）。

追隨か合作かを問題にする場合、両者が対抗する側面で見える必要がある。これについて、原口氏は内諭周旋方式の採用という重要な論点を提示している。しかしなぜこれが採用されたか、「公議政体派」への譲歩の結果なのか、あるいは倒幕派の単なる判断の失敗なのかまでは明らかにしていない。政治的主導権の問題を考えるには、ここまでふむこむ必要があるだろう。そこで本稿はこの問題をふくめ、クーデターの立案、実施の過程の両勢力の関係を具体的に解明することにする。そしてそのなかで正当性原理の問題も浮かび上がってくるだろう。

この王政復古クーデターについては、官製維新史学のつくった像がある。その像の基礎を定めたものとして、多田好問編『岩倉公実記』（原書房復刻、一九六八年）をあげることができるだろう。維新政府の最高指導者であった岩倉の顕彰を、明治政府はその死後こころみた。この編纂作業は大規模な修史事業となり、膨大な史料を収集したうえで一九〇六年に完成した。なかば史料集のようなこの浩瀚な著書は、これ以後もつづく一連の官製維新史修史事業のみならず、戦後の研究におい

でも典拠として使われてきた。⁽⁴²⁾

もつとも現在においては、『岩倉公実記』、とくにその地の文が容易に信用できるものでないことは、明治期政治史研究者の間の常識となっている。そして事実経過の再検討の試みも、色々なされてきている。また、政治過程の典拠は、二次史料ではなく、一次史料にまでおろることが原則として確立されつつある。しかし、これはなお膨大な作業であり、一挙には進まない。王政復古クーデターの事実経過についても、その基本線は『岩倉公実記』がなお定説の位置をしめているといえよう。本章がその再検討を試みる所以である。

一、クーデター計画の修正

一二月二日、後藤はクーデターへの参画を決意した。以後、後藤の活動は二つの方向に向けられる。第一はクーデター計画の修正、その穏和化。第二は外部への根回しである。まず後者について述べれば、それはクーデターへの参画が予定されている他の「公議政体派」諸藩への事前の根回し、さらにはクーデターの対象である慶喜に対する内通であった。後藤は大久保に対して、尾越、慶喜に速やかに計画を伝え、根回しをするよう主張した。これは大久保の容れるところとならなかったが、後藤は五日以降、内密にそうした根回しを開始したのである。まず、五日、後藤は春嶽の許を訪れ、薩摩の計画を告げ、それを慶喜、尾張に通告するよう求めた。⁽⁴³⁾ また、後藤自身、慶喜側近の永井と対策を相談するつもりだった。⁽⁴⁴⁾ 同じく五日、土佐「公議政体派」の神山左多衛は安芸の辻将曹にこれを知らせている（『神山地日記』一二月五日）。こうした後藤の根回しはクーデターの阻止を意図したものではなく、事前にこれを知らせることでその了承を求め、クーデターが開戦につながるのを予防することをねらったものであった（以上、拙稿B論文、二四頁）。一方、クーデターが眼前に迫っているの

を知らされた諸藩は早急にその対応の決断を迫られたものと思われる。そして会桑や摂政に通報した藩がなかったことは、彼らも後藤と同じく、クーデターへの参画を決意したと見ていいだろう。

次に第一の計画の修正について見る。王政復古のクーデター計画はどのように修正されていたのか。この問題については、これまでそれが問題であること自体意識されてこなかった。クーデターでは薩摩の計画が、期日の問題以外はそのまま実施されたと理解されてきたのである。しかし、この理解は実際には妥当ではない。以下、計画の修正過程を明らかにすることにする。

すでに述べたように薩摩の計画は一月二五日に決定された。この案はただちに公家倒幕派に示される。二七、二八日の「嵯峨手記」で「二冊」「四冊」と記されているのがこれにあたる。そして前章二節二で見た、公家倒幕派への大久保の説得過程のなかで、彼らの意を受けた修正は行われていったものと思われる。そして二日、後藤への通知が行われるが、このときは口頭のみであり、草案を見せ詳しい手順を説明したのは五日であった。⁽⁴⁵⁾ 計画について後藤がその期日について修正を求めたことはよく知られている。しかし、その修正は期日のみに留まらなかったと思われる。

二五日に薩摩が決定した計画は、御所を軍事的に制圧し、慶喜を排除した新政権の強行樹立を行い、慶喜に辞官納地を迫るというものであったが、上方徳川勢力への攻撃は含んでいなかった。これは計画の核をなす部分には変化はなく、実際に一二月九日これが行われている。しかし如何にこれを実施するか、その具体策については、修正が加えられているのである。

クーデター計画の修正過程を見ることが出来る史料に、『岩倉具視関係文書』〈憲〉収録の「岩倉家蔵本写 王政復古発令一件 全」という写本がある(文書番号252)。この写本は、薩摩・公家倒幕派がクーデターを準備する過程で作成した種々の計画案を筆写したものである。⁽⁴⁶⁾

このなかで、ごく早い段階の案と推定できるものに、冒頭が「当日 一議奏より摂政始国事掛両役一同 召之事」とあるものがある。⁽⁴⁷⁾この案で注目すべきことは、辞官納地について一方的勅命方式が記されていることである。すなわち、「大政返上將軍職辞退被 聞食、断然 王政たるの趣、且大樹進退云々給禄云々速に大樹え 仰せ渡されの事」である。

ここで構想されている勅命降下構想で注意すべきことには、それが、廟議をへたうえで出されるのか、それなしでまさに天降りとして出されるものなのかがある。これについてこの案の考えは、後者であったと思われる。この草案は、クーデター当日、摂政・両役さらには慶喜まで召集することになっていたが、この顔ぶれでの廟議では辞官納地の決定など思いも寄らないことだろう。摂政や慶喜は廟議のためではなく、一方的に勅命を仰せ渡されるために呼ばれたとみるべきだろう。

クーデター後、大久保は岩倉に、辞官納地は一方的な勅命で命じるのが「御定算」であったと語っている（『大久保利通文書』〈史〉二、一三三頁）が、実際に、最初の案はそうしたものであったのである。

しかしこの方式は修正される。二月五日付の蓑田伝兵衛宛書簡（『大久保利通文書』〈史〉二、五六、七頁）で大久保は慶喜の処遇について以下のように述べている。「五藩 召之上、尾越に 命せられ、十分反正謝罪之道を「慶喜に」御内諭有之、無異議 朝廷御趣意通断然訴出候得は、始て真の反正実行願ると可申候得は、其上は「慶喜に対し」公平寛大之御処置被為在、御至当なるへし」（割註略す）。すなわち、尾越による内諭周旋方式である。

ではこの尾越の派遣は廟議をへたうえでなされるものだったろうか。先の写本にはこの五日頃作成と思しき草案がふくまれている（冒頭が「被 仰渡向一紙類 一当朝卯一点」云々のもの）⁽⁴⁸⁾。この草案での辞官納地の方式は、尾越の内諭周旋であった。⁽⁴⁹⁾そしてこの草案で計画されているクーデターの段取りは、御所の封鎖↓新政府の発足↓最初の廟議（小御所での会議）という実際のそれと同じものになっている。この点より、辞官納地問題も現実に行われたように、廟議で評議されることになっていたと見なせよう。⁽⁵⁰⁾辞官納地は、勅命を天降りて慶喜に下すという当初の方式から、尾越による内諭周旋を

廟議をへたうえで決定するという実際のクーデターで行われた方式に五日頃までに修正されたのである。

しかし、計画が五日頃に完全に固まっていたわけではなかった。右の五日頃の草案には実際のクーデターでは行われなかった以下の内容をふくんでいるのである。

第一に勅命による会津・桑名処分である。すなわち、守護職・所司代罷免などの処分を御沙汰書により行おうというのである。御沙汰書の文面は二通り考えられており、一つは、「御不審之筋有之被止参 朝候、早々帰国可待 御沙汰候事」という参朝停止、帰国命令のみを述べるもの、もう一つは、「奸臣結疊惑 聖徳、残害忠良、使天下声 朝廷不明之誚は、実に汝是由」と文字通り罵倒したうえで、領土爵位を奪い東山の僧院に蟄居を命じるという会桑の取りつぶし命令であった。そして、実際に出すときはその折衷をはかるべしとされていた。

この会桑処分沙汰書と廟議の関係はどうだろうか。これについても直接示す文はないが、これは新政府成立とまさに同時に、新政府発足後の最初の廟議を行う前に出すつもりであったと思われる。なぜなら、この沙汰書は参朝停止命令であり、摂政以下に対するそれに明らかなように、御所封鎖の前提であるこの命令はクーデターの開始と同時に出されることになっているからである。(次節で引用する「嵯峨手記」のAの部分〔五六頁〕、参照)。

第二に、徳川方の治安部隊である新撰組と見廻組に対する攻撃で、「早々召捕可糾明、若手に余り候節は打取候ても不苦旨 御沙汰候事」とされていた。

第三に、二条摂政以下の朝廷の現当局者に対する処分であるが、単に解任・参朝停止のみではなく、御不審の筋があるとして謹慎処分を命じられていた。

以上の三点の何れも実際のクーデターでは実行されておらず、したがって九日までに修正が加えられたことになる。この修正も重要な意味を持つ。なぜなら、会桑や新撰組・見廻組に対してこの草案にしたがって攻撃的対応をとれば、彼らの反

発は必至で、ほぼ確実に軍事衝突につながるからである。

辞官納地命令方式の変更、さらに会桑・新撰組への対応の修正、これらはいずれも計画の穏和化といえるものであった。そしてこの穏和化は、クーデターが内戦につながる危険性を抑える意味をもつだろう。⁽⁵¹⁾

こうした計画の穏和化、修正がどのように行われたかを直接示す史料はないが、推測は可能である。まずこの主張者について言えば、第一に後藤（「公議政体派」）であろう。慶喜の政治的打撃の緩和や内戦の回避は、彼がまさに望んでいることであつたからである。第二は公家倒幕派のうちの穏和派の中山・正親町三条。すでに述べたように大政奉還以降の慶喜は彼らにとり敵ではなかつた。そしてさらに彼らはクーデター方針を賛同して後も、平和解決、内戦の回避を強く望んでいたのである。⁽⁵²⁾

このような後藤や中山らの主張により当初の薩摩・岩倉の計画は修正されていく。では、これに対する薩摩の意向はどうであつたろうか。

一二月に入ると、薩摩倒幕派の慶喜に対する評価は一貫して上昇していった。⁽⁵³⁾ 一月二七日段階では西郷・大久保はまだ彼を疑っていた（「丁卯日記」、二四五頁）。しかし、長州復権に対して慶喜が好意的なのが明らかとなり、彼と会桑の路線の違いが明確となつた一二月五日には、ついに大政奉還は慶喜の真意だと判断するようになった。そしてクーデターに対しても、慶喜はこれを受け入れるだろうと見るようになり、クーデターに際して衝突が起きるとすれば会桑とのみと判断するようになったのである（以上、拙稿B論文、三二頁）。

そしてその会桑に対しても、衝突にいたるかもしれないと覚悟はしていたが、積極的にこれを挑発しようとは考えていたわけではなかつた。⁽⁵⁴⁾ 慶喜の動向より平和解決の方向が出ているのに、しいてこれを戦争に向かわせるといふ考えは大久保にも西郷にもなかつた。一二月八日付の岩倉宛の大久保らの建言には、政治革新の方策として戦争自体を称揚する以下の有

名な一節がある。「二百有余年之太平之旧習に汚染仕候人心に御座候得は、一動干戈候て返て天下之眼目を一新、中原を被定候御盛挙と可相成候得は、戦を決候て死中活を得之 御着眼最急務と奉存候」(『大久保利通文書』〈史〉二、七二頁)。この戦争論は薩摩倒幕派の政治路線の特徴を示すものとしてこれまでしばしば採り上げられてきた。しかし、これは多分に岩倉説得のための修辞である、実際の行動においては、彼らは戦争自体を目的としているわけではなかったのである。(なぜこうした戦争論が記されたのか、その事情については三節で述べる。)

天皇・公議政体の樹立を可能なら平和的に達成する、この点において後藤も薩摩倒幕派も差がなかったことは前章ですで見たとある。そして慶喜への認識をあらため平和解釈の見通しが高まつてきた以上は、本筋以外の問題より戦闘となることは、薩摩倒幕派にとって望ましいものではなかったろう。会桑や新撰組・見廻り組に対する穏和化は薩摩倒幕派にとり譲歩できるものであったのである。

もともと慶喜への評価の好転といつても、それは彼がクーデターを受け入れ辞官納地を行うとだろうという見通しの上での話であり、辞官納地の受け入れは薩摩側にとって絶対の条件であった。この辞官納地は(55)その実質的内容もあるが、同時にそれはこれまでの悪政の謝罪としてなさせることにも意味があった。それにより、幕政Ⅱ悪政イデオロギーを確立し、慶喜の権威を傷つけ、連合政権となるであろう新政権において、慶喜、そして旧幕府勢力に政治的負い目をつけることを薩摩はねらっていたのである。慶喜が辞官納地を平伏して受け入れることが必要であり、これについて交渉も妥協もありえなかった。

薩摩倒幕派の政治行動について見れば、それは万国に対峙しうる新政体の樹立のために天皇・公議政体を設立するという理念的動機もあったが、同時に国政への自己の発言権を拡大するという権力抗争的動機も一貫して存在していた。大政奉還が行われ、さらに慶喜の「反正」が真意であると判断されるようになり、天皇・公議政体の樹立というかつては困難と見え

た課題達成の展望がたつと、彼らの権力衝動は逆に肥大化し、連合政権となるであろう新政権における自己の主導権をなんとしても確保しようという意欲が強まったのである（拙稿B論文、三三、四頁）。

しかし受け入れか否かの二者択一を慶喜に迫る勅命方式に対し、内諭周旋方式は交渉・譲歩の余地を残し薩摩にとっては不満足なものであった。この採用が薩摩にとって不本意なものであったことは、先に言及した大久保らが岩倉に送った一二月八日付の著名な建言（『大久保利通文書』〈史〉二、七二頁）に明らかとなる。すなわち、尾越が伝える内諭（『御内議』）は寸分も動揺すべきではなく、このためには戦争となっても仕方がない、と建言は述べ、尾越の周旋が交渉・譲歩につながることを強く牽制しているのである。

薩摩がこれほど不満なのになぜこれが採用されたのか、その理由は公家倒幕派の意向にあった。そのことは右の建言より明らかとなる。ここで大久保らは、内諭周旋方式が採用されたことについて、「実に至当且寛仁之 御趣意奉感伏候」と岩倉に皮肉を述べた上で、辞官納地については今後どのような議論が起きようが、「寸分 御動揺不被為在」、もし内諭周旋に慶喜が応じないときは、速に勅命で断然これを命じるべきと強く主張しているのである。

クーデターの準備過程で、他にも決行の期日問題や尾越への事前通知問題で、後藤と薩摩倒幕派の意見は対立したが、その場合、最終的決定は公家倒幕派が下している（拙稿B論文、二六頁）。公家倒幕派、なかんずく外戚中山の意向は重かったのである。

計画の修正について最後にあげるべきは、公議尊重の意識の存在であろう。会桑の罷免・帰郷は、先の沙汰書案のような極端な文面をとるのはともかく、そのこと自体は「公議政体派」も望むものであった。⁽⁵⁶⁾ したがって、先の草案のような挑発的なものではなく、単に参朝停止、帰国を命じる勅命を天降り式に出すことなら、後藤、そして中山らも賛成しうるものであったろう。しかし、実際にはそうではなく、これは次節で述べるように廟議にかけられることになった。こうした修正

を後藤らが求めたのは、重要な政治問題は公議にかけるべきという意識によるものと言えよう。

クーデターに参画以降、後藤らは薩摩の計画に以上のような修正を求め、それを実現したと思われる。この他にも、クーデターの期日問題や尾越へ通知の時期の問題で当初の計画の修正を後藤は要求し、前者についてはその主張を通してのこととすでに拙稿B論文で明らかにした通りである。クーデターに参画するなか、後藤は、慶喜に対する政治的打撃（政権発足の排除、辞官納地）という基本性格までは変えることはできなかったが、その範囲内で内容の大幅な穏健化に成功している。「公議政体派」は薩摩倒幕派の意向に単に追従したわけではなかった。王政復古クーデターはまさに両者の合作クーデターだったのである。

このように修正された計画がいかに行きわたったのか。次に見ていくことにする。

二、新政府の発足

1. 密 勅

王政復古クーデターの実際の動きは一月八日に始まる。この日、尾張の尾崎忠征・丹羽淳太郎が薩摩の大久保・岩下方平に伴われ岩倉の許に赴いた。越前の中根雪江・酒井十之丞も土佐の神山左多衛・福岡孝弟とともにこれに続いた。訪れた彼ら四藩重役に岩倉は、王政復古を行うという「内勅」が下ったと告げるとともに、諸侯に翌日の参内を命じる「御書付」と、御所制圧の分担を記した「一紙」の二つの文書を渡した（『丁卯日記』）。これらの勅はもちろん正当な手続きをへたものではなく、討幕の密勅、見合わせ沙汰書に続く第三の密勅である。前章二節付論で密勅の効果について論じた。ここでは、これまでの研究上、閉却されてきたこの第三の密勅について具体的にそれを見ることにしよう。

まず「御書付」について見る。それは以下の通りのものであった（同書、二五五頁）。

応召早速登京御満足候、随而不容易大事御評決之儀有之、唯今参朝可有之旨、御沙汰候事

一二月九日、

この「御書付」は宛所を欠くが、在京中の四藩国主について宛てたもので、具体的には九日卯一点（午前五時頃）の参朝を命じるものであった（「丁卯日記」、二五五頁）。この文書で注目すべきは日付である。それは翌日の九日になっており、八日ではない。九日の寅一点（午前三時頃）に御所の仮建に四藩重役を呼んで渡すはずなのだが、そうなると手遅れになるかもしれないので、心得のため今わたすことにした、というのが岩倉の説明であった（同書）。つまり、厳密に言えば、これは「未発之御密旨」（密旨の予告・内示）であり、降下された勅命と言えるものではないのである。⁽⁵⁷⁾

またこの「御書付」は宛所のみではなく、奉者も欠いている。こうした奉者・宛名（特に前者）を欠く勅命は幕末期や維新政府発足直後において多く出されている。しかし内容の重大性と危険性を考えれば、こうした欠如は受け手にとりきわめて不安なものであったろう。討幕の密勅や見合わせ沙汰書は奉者を記し、責任の所在を示しているのである。

こうした形式的問題をふくむ「御書付」を文書として信じうるとしたら、それを支えるのは、公家倒幕派へ下ったという「内勅」であろう。しかし、この「内勅」も安心できるものではなかった。すなわち、岩倉はそれが降下したと語ってはいるが、その実物は四藩藩士に示されていないのである。

八日、四藩重役に示された「内勅」「御書付」はこのように形式面でも大きな問題をふくむものであった。第三者から見れば、これを信じて自己の命運をかけようようなものとはとても言えないだろう。

八日の申し渡しの段階の計画では、卯刻（午前五時頃）の国主参内と兵力の御所進入は同時であった（「当日覚悟之事」、「丁卯日記」、二五七頁）、護衛の兵をそのまま御所警備につけようと考えていたのだろう。しかし実際のクーデターは計画

通りにならなかった。八日からの廟議がのび徹夜となったため、卯の刻参内は実行できなかった。そして、五藩中、尾越芸三藩国主は八日からの廟議に出席しており、そのまま御所にとどまることになった。また、廟議に出席していない茂久・容堂も兵力出動と同時にではなく、すでにその藩の兵士が御所に入ったのち、未刻(午後三時)頃には茂久が、申の中刻(午後五時)頃には容堂が参内している。⁽⁵⁸⁾ この結果、各藩の兵士はその国主とは別に御所に進入したことになる。兵士の出動のきっかけとなったのは、徹夜の廟議が終わり摂政以下が退朝したという午前一〇時頃の「一左右」であった(『大久保日記』)。これを機に西郷・大久保・岩下は参朝、薩摩兵士も追々繰り出した(同)。他の四藩もこれに続いたと思われる。そしてこの出動のきっかけとなったのは、「一左右」である。勅命をこのように表記するとは考えられず、これは単なる通知だろう。つまり、新たな御沙汰、勅命はなかったのである。結局、兵士出動という決定的行動への根拠を考えるなら八日の「御書付」ということになるだろう。

では、なぜ彼らは出動したのだろうか。「御書付」の権威だろうか。しかし、これがあまりに問題をふくむものであったことはすでに述べたとおりである。そしてこの「勅命」の権威の乏しさは、八日の夜に行われた後藤らによる容堂への説得にも見ることが出来る。容堂は、これまでクーデター計画を知らされておらず、八日上京して後藤らより初めてこれを知られ、強く難色を示す。これに対して後藤らは必死の説得を行う(『寺村手記』、五〇二―五〇四頁)が、その根拠はすでに慶喜への根回しはすみ彼も納得しているということであって、本来ならば主張されるべきこの密勅ではないのである。

八日の密勅はこのようなものであった。それにもかかわらず、言わば勸進元である薩摩のみではなく、土佐・越前・尾張、さらには安芸もこれにしたがい御所に出兵した形になっている。なぜか。これについて安芸の例を見よう。安芸は他の四藩と遅れたが同じく八日、岩倉より重役久保田平治に申し渡しがあった。そして久保田よりこれを聞かされた辻将曹は以下の書簡⁽⁵⁹⁾を後藤に送っている。

今晚彼の卿（岩倉具視——原文）より御呼出し有之、明朝卯の上刻五藩参内云々との御達し書（「御書付」）御渡に相成候旨申聞、兼ての義に何も相違無之候得共、余り火急之事、寡君于今参内留守中殆と当惑之至に候得共、勿論「寡君にも」異議も有御座間敷、其手組に取計置候得共、五藩御示合之間合無御座、折角尊藩には如何被為在候哉、大様左之件件奉伺度、御書入奉願候。

一 凡何時頃御参内之御手組や

一 守衛方服之事

一 君公供奉は平常へ増減如何や

すなわち、「御書付」の申し渡しを受け、辻も参画を決意しているが、それはこれが契機となったわけではなく、「兼ての義に何も相違無之」とあるように、すでに参画する決定をしていたからであつた。前節で述べたように、後藤は薩摩倒幕派には秘密に、クーデター計画を「公議政党派」諸藩や慶喜に知らせていた。「公議政党派」諸藩在京幹部たちにとって計画は初耳ではなかつたのである。そしてことの重要性よりそれを知らされた段階で、彼らはそれへの対応を決断していたと思われる。そしてそれはこの安芸の例に見られる通り、参画であつた。クーデターへの参加の決断が先にあり、その権威付けとして密勅があつたわけであり、決して逆はないのである。⁽⁶⁰⁾

2. 御所空間の制圧

クーデターの第一段階であるとともにその鍵をなすのは御所空間の制圧である。前項で見た経過で、薩摩を中核とする五藩の兵士は午前一〇時頃より出動、御所を掌握した。大久保は日記でその様を「我兵を以 禁闕警衛之様未曾有之壯観、見る者肝を失ふ」と自賛した。しかし、出動にいたるまでは、彼ら薩摩倒幕派の不安は非常なものだったのである。

その不安の理由は、八日よりの廟議であった。記述のように計画では、八日の廟議はその日のうちに終わり、摂政以下が退朝した後、翌九日の早朝、卯の刻にクーデター参加者が御所に参集することになっていた。しかし徹夜の廟議がこれを狂わせたのである。こうした退朝の遅れに西郷は「一時の勢いにては瓦解の模様⁽⁶¹⁾」とまで危機感をもった。

しかし、摂政以下は何らの軍事力を持たない公卿である。それに対してこの危機感はいささか不釣り合いなように見える。しかし、それはクーデター計画が持つ意外な脆さの現れなのであった。すなわち、現に参内中の摂政以下の公卿を暴力により排除することは新政府の正当性を大きく傷つけるがゆえに、まさに最後の手段であり、極力避けねばならず、そのためにはとにかく彼らの退朝を待たなければならなかったのである。春嶽が回想するように、「退出なければ岩倉始之取掛りも⁽⁶²⁾」出来ないのである。

そしてこのことはクーデターの阻止、それが無理にしてもその妨害は容易であったことを示している。朝廷の正当な管理者である摂政など現当局者に情報を伝え、その警戒を促しさえすればよかったのである。しかし後藤は慶喜や「公議政体派」諸藩には通報を行ったが摂政らにはなさなかった。そして、六日に情報を後藤より越前経由で知らされていたに慶喜もこれを知らせなかった。

また御所空間の掌握には建物のみではなく、その門の制圧も必要であった。⁽⁶³⁾ 御所の門は多く、中には事実上、無警戒で簡単におさえる門もあったが、御所空間の遮断、完全な制圧には会桑が守備する二つの門の奪取が必要であり、これをなすうかが、御所空間掌握の軍事的な鍵となる。桑名が警備する公家門は門自体は土佐が、門前の営所は薩摩が接收することになっていた。このとき御所に出動していた薩摩藩士折田要蔵の日記（『折田要蔵日記抄』、前掲『忠義公史料』四）が記すところでは、公家門は桑名藩兵が、「早くも形勢を見定、手早に人数を引揚」たので、「昼九つ時分には受取人も無之」なつた（五四五頁）。つまり、ただならぬ形勢に、接收の薩摩兵が来る前に自主的に退去した模様である。一方、会津は蛤門

を警備していたが、ここの接收担当藩は土佐であった。会津の警備兵は桑名と違いここにどまつたが、土佐兵が出動し慇懃に挨拶するに及んでここを退去した。⁽⁶⁴⁾ 会桑とは戦闘となる可能性があると薩摩側は覚悟していた。⁽⁶⁵⁾ しかし、会桑は平和的に御所警備より退去したのである。

これは会桑守備兵にとってやむをえない対応であった。会桑が門の警備にそれぞれほどの兵をおいていたのか分らないが、常時多数の兵を置いていたとは考えられず多くてそれぞれ数十というところだろう。それに対しこの日、薩摩は、衝突になることもあると覚悟していた以上、はるかに多数の兵力を繰り出したはずである。また、会桑が掌握していたのは、公家門・蛤門の二門であるが、薩摩兵は他門よりも禁裏内に進入している。会桑は言わば門の内外に敵を向かえていたことになる。天皇を抱えて禁裏を背に戦うというかつての禁門の変のような戦闘はもはやなすことができない。退去は不可避であったと言えよう。もちろん、事前にクーデターを予期していれば、兵力の増強、さらには禁裏内にまで兵力をいれるなどの対応をとることも会桑にとって可能だったろう。その場合の薩摩との軍事的衝突となり、その結果がどうなるかはわからないが、実際にあったようにたやすく御所空間・天皇を制圧されることはなかっただろう。しかし、慶喜は彼らに計画を知らせなかった。この結果、クーデターは会桑にとって不意打ちとなった。さらに慶喜は、通知しなかっただけでなく、この九日、松平容保・定敬を二条城に呼びそこに留めている。暴発の抑止である。

摂政・会桑への不通知、会桑暴発の抑止、こうした慶喜の対応が薩摩の御所制圧を可能にしたと言えよう。

3. 新政府の発足

御所の制圧が成功するといよいよ新政府の発足となる。これについての『岩倉公実記』の記述を検討する。『実記』は以下のように述べる（中巻、一四六―一六一頁）。二月九日辰刻過ぎ、長州復権問題についての徹夜の廟議が終わり、摂政

以下その参加者が退朝すると、入れ違いに岩倉らクーデター派の公家、諸侯が参内、その後、薩土尾越芸五藩の兵も出動。そのうえで、天皇は学問所に親王諸臣を召し勅諭（いわゆる王政復古の大号令）を発し、三職の任命を行う。さらにその夜、天皇は小御所に出御、廟議が行われ（いわゆる小御所会議）、ここで慶喜の辞官納地が議せられる、である。⁽⁶⁶⁾

これによれば、新政府は、天皇の一方的な宣言により発足したことになる。しかし、公家倒幕派の一員で、クーデターの中心的参画者の正親町三条実愛の手記（「嵯峨手記」）の記す経過はこれと異なっている。手記の当日の条を長文ながら引用する。

一尾、越、芸等、昨日参内のまゝ、不及退出在朝也、一辰頃、撰以下退出候、一五はん兵士追々繰込、召薩土主人義徒漸参集、

一挙大義、一巳半頃より、薩兵くり入守衛宮、自余四藩兵、追々相加、有志堂上参会、

一召五藩、尾、越、薩、土、芸等、諸藩重役等、又堂上地下等、同上召之、

A
一御趣意口向へ示渡、一向候以マ一紙御趣意被仰渡、一撰政以下、三公、国事掛、撰家、宮等、一同被止参内のこと、兩役同上也、

一近臣参御前奉守護、一帥、常、桂、仁和寺等宮参入、

B
一於小御所、官武上下一同有議、帥常仁等三宮、中山、予、中御、万里小路、長谷、橋本少将、岩倉前中将等会議也、
藩士等
候於下段

C
一召御前有勅、可有尽力旨也、一総裁、議定、参与等三職、夫々被仰付候、一地下参与可差上旨、先五藩へ被仰下候、
一桑、守護所司代等職、差免候旨、大樹より申上、

一九門以下、番所へ心得、以使番示遣候、

D―一徳川内府へ、以尾越明日可被仰下旨有議定、鎮定之儀也、總裁、議定、参与^上、等、一同會議也

Cの部分の傍線部の「有勅」とは、王政復古の太号令である。ここで注意すべきことは、その発令の前に、Bの部分が表示するように、小御所で「官武上下一同」の評議が行われていることである。つまり、まず小御所で「官武上下一同」が会議が行い、その後で、天皇が彼らを召し、そこで天皇より太号令と三職人事が発表され、そのうえであらためて小御所で会議が行われたというのである。

『岩倉公実記』の示す像が、接見↓小御所會議であるのに対し、「嵯峨手記」は、第一回小御所會議(B)↓接見(C)↓第二回小御所會議(D)、としているのである。この相違は、大きな意味を持つ。前者によれば、新政府は、一方的な勅命により、まさに天降り式に発足したことになる。しかし、後者では、勅命はまず会議が行われた上で出されており、新政府は参加した公家・諸侯・藩士の評議をへた上で成立したことになるからである。

何れの像が正しいのか。周知のように『岩倉公実記』は個々の記述の典拠を示しておらず、史料批判を直接なすことができない。しかし、以下の一次史料が「嵯峨手記」を裏付けている。まず、国元にクーデター前後の状況を報告する一二月一二日付蓑田宛太久保書簡(『太久保利通文書』(史)二、八八頁)はこう記す。

於 朝廷御列侯参 内御待容堂公、申の中刻頃御参にて凡て御揃相成、兼て 御発表之御手順は御内定被為在候得共、
尚於 小御所宮公卿列侯藩士迄被尽衆評、一応退散、別紙之通三職を被命候。然して再度於御同所御評議、尾越両侯を
以、徳川氏官一等を降、領地返上等之事件、自ら訴出謝罪之道を立、真に実行を拳候様、周旋を被命、 両公御受相成
候

傍点部が示すのは「嵯峨手記」と同様の手順である。

また、先に言及した薩摩藩士折田要蔵の日記の一〇日の条も、「昨晚諸賢明公卿御参内御決議之上、勅許にて、断然たる

王政復古之 宣旨を賜ひたり」(前掲『忠義公史料』四、五四六頁)と述べている。「嵯峨手記」が示すように、新政府はまず諸侯とその家臣・公卿が会議を開き方針を決定したうえで、発足したものである。⁽⁶⁷⁾

こうした段取りは計画通りのものであった。前々項で見た八日に薩土尾越四藩重役に渡された四藩藩主への参朝命令(「御書付」)は、大事の仰せ渡しではなく、大事の「御評決」をその理由としていたのである。⁽⁶⁸⁾

もちろん、ここで新政府を発足させること、大号令の文案、三職人事などはこの場で急に協議・決定されたものではなく、右の大久保書簡の傍線部にあるようにすでに準備されていたものであり、参加者には事前の根回しが行われていた。したがって、第一回の小御所会議はその確認、形式に留まったと見るべきだろう。しかし、重要なのは、一方的な勅命降下ではなく、こうした会議という形式をへたうえで新政府が発足していること、そうした手順をとる必要があったことなのである。⁽⁶⁹⁾

4. 王政復古の大号令

次に、王政復古の大号令について検討する。右に見たように、王政復古の大号令は、第一回小御所会議にかけられ、すぐあと天皇により発せられたものである。このとき出された大号令とはいかなるものであったろうか。

『岩倉公実記』は天皇が大号令を発したと述べ、そのあとで史料を引用している(中巻、一四八―一五〇頁)。この引用も典拠は不明であるが、出典のはっきりした大号令の史料(『大久保利通文書』〈史〉二、九八―一〇一頁)と比較するに、若干の異同はあるが、意味にかかわるものはない。では、この『岩倉公実記』所載の大号令が接見の場で発表された大号令であったとしていいだろうか。

そう考えるとき大きな矛盾が生じる部分がある。すなわち、「内覧勅問御人数・国事御用掛・議奏・武家伝奏・守護職・所司代総て被廢絶候事」という既存制度の廢絶条項中の守護職・所司代である。なぜなら、大号令が出された後の第二回の

小御所会議で両職の廃止Ⅱ会桑罷免が辞官納地問題とともに議題になっているからである。⁽⁷⁰⁾すでに大号令で廃止されているなら、あらためてここで議するのは奇妙なことである。会桑罷免は接見段階の大号令にはふくまれていなかったと見るべきではないだろうか。

この点について、前章で言及した「岩倉家蔵本写 王政復古発令一件 全」収録の大号令案を見るなら、その廃絶条項にはいずれも守護職・所司代はふくまれていないのである。⁽⁷¹⁾

この両職廃止Ⅱ会桑罷免は、薩摩や岩倉がクーデターを計画するにあたって、かならず実現しなければならない重要課題の一つであった。会桑は京都における徳川側の最強の軍事力であるとともに、幕府の復活をねらう保守派であった。したがって、危険な会桑を解任し、帰国させることはクーデターの成否を決める重要課題となる。このことは、クーデター構想が登場した直後、一月二七日付の国元宛書簡（青山忠正『明治維新と国家形成』吉川弘文館、二〇〇〇年、二八〇頁）で長州の品川弥二郎が計画について以下のように記していることよりも明らかである。

不日惣参内、大政官を立、即日將軍を諸侯の列に下し、会桑を奪職、帰国を命し、我藩の兵を入るる等の勅を下し
会桑罷免はなんとしも実現しなければならぬ。いかにそれを実現するのか、ここで示される薩摩・長州の考えは、右の品川書簡の傍点部にあるように、勅命による解任であった。そしてクーデターが計画される中で実際にかかる勅命が出されることが考えられていたのは、前節で見たとおりである。

しかし、実際のクーデターにおいて会桑罷免は、直ちに出不されず最初の廟議、第二回小御所会議の議事にかけているのである。会桑罷免は「公議政体派」をふくめ共通する考えであった。それなのに、このような扱いになったのは、こうした重要な政略問題は、一方的な勅命ではなく、廟議（公議）をへるべきだという意識があり、それを「公議政体派」が主張したからであろうことは前節で述べたところである。

では、現在知られている大号令のテキストはいつの段階で成立したのだろうか。少し先回りするが、これについて検討しておこう。「会津藩文書」(『史籍雜纂』〈史〉二)には「十二月九日從御所出候書付」として大号令が載せられているが(三二頁)、その廃絶条項には守護職・所司代がふくまれており、九日中にこの追加が行われたと見ることができる。この追加はいかにしてなされたのだろうか。

第二回小御所會議において、会桑罷免も辞官納地問題と同じく紛糾した。しかし、新政府の決定をまたずに慶喜が自主的に会桑を罷免し、これを山陵奉行の戸田忠至を通じて、御所側に申し出たのでこの問題は解決した(「丁卯日記」、二六二頁、五六二頁引用「嵯峨手記」傍点部)。難題が解決したとなると、新政府の権威を高めるために、新政府がこれをなした形にする方が望ましい。そこで、すでに発した大号令の廃絶条項に守護職・所司代を加える修正が行われたのではないだろうか。ここに現在の大号令のテキストが成立したものと思われる。

大号令の修正はこれで終わらなかった。こののち一二月一四日、大号令は諸大名・公家一般に公布されたが(「丁卯日記」、二六八、九頁)、その前日よりその文面をめぐって廟議で激しい論戦が行われていた(同、二六七頁)。そしてこの結果、またも重要な修正が加えられているのである。⁽⁷²⁾ 大号令はいったん天皇が発令したものである。しかし、綸言汗のごとし、とはならず、廟議により事後的に修正を加えることができた。大号令は不変の文書ではなく、政治的に改変される文書なのであった。

三、小御所会議

1. 岩倉の一喝をめぐって

接見が終わり御前を退出後、しばらくして第二回の小御所会議が行われる。これが普通言われる小御所会議である。

この会議の議題は慶喜の辞官納地と会桑の罷免である。この辞官納地問題について激烈な議論が展開したことはよく知られている。この激論に関し『岩倉公実記』が記すきわめて有名な挿話がある。それは、容堂と岩倉の論戦、岩倉の容堂への叱責である。まずこれについて検討することにする。

会議の最初、容堂は、慶喜をただちに会議に招致するよう主張するとともにクーデターを非難し、「二三の公卿は何等の意見を懷き此の如き陰険に渉るの挙をなすや頗る暁解すへからず、恐らくは幼冲の天子を擁して権柄を竊取せんと欲するの意あるに非らざるか」とまで言った。これを岩倉が叱責し、「此れ御前に於ける会議なり、卿当さに肅慎すへし、聖上は不世出の英材を以て大政維新の鴻業を建て給ふ、今日の挙は悉く宸断に出つ、幼冲の天子を擁し権柄を竊取せんとする言を作す、何ぞ其れ亡礼の甚だしきや」と述べ、これに容堂が恐悚し失言の罪を謝した、というのである（中巻、一五八、九頁）。

これは一種の名場面であり、小説やドラマによく登場するものである。そしてそのみではなく、正当性原理を考える場合、重要な位置をしめるものとなる。例えば、安丸良夫氏の名著『近代天皇像の形成』（岩波書店、一九九二年）は、この岩倉の一喝により、「歴史は新しい門出をしたのである」と評価する（二六六頁）。なぜ新しい門出なのか。クーデターの実態は容堂が主張する通りであり、その発言は正当である。しかし、そうした正当な批判は岩倉の叱責により圧倒されてしまふ。このことは、誰も表向きには反対できない超越的権威としての天皇という存在が前面に押し出され、権威にみちた中心が作り出されようとしていることを意味するからである。『岩倉公実記』が事実を伝えているなら、そうした位置づけはた

しかに可能であろう。しかし、これは事実だろうか。

第二回小御所会議に内容については、「丁卯日記」が最も詳細な一次史料である。『岩倉公実記』の小御所会議の叙述は、議事が紛糾しいったん中断するまでは、「丁卯日記」とほぼ照応しており、おもにこれによっていると思われる。しかし、それにもかかわらず、「丁卯日記」と『岩倉公実記』との間に相違が存在している。

その最大のものがこの挿話の有無である。「丁卯日記」には容堂の痛烈な発言の記録はあるが、それに対する岩倉の叱責は記されていないのである。すなわち、『岩倉公実記』が、容堂の批判↓岩倉の叱責↓容堂の恐縮↓春嶽の批判↓岩倉の再反論↓大久保の反論、と続くのに対し、「丁卯日記」では、容堂の批判↓春嶽の批判↓大久保の反論↓岩倉の反論、となっている。そして、容堂の痛烈な「不敬」発言に対して、「丁卯日記」は、叱責のみではなく、それへの反論さえ記していない。「丁卯日記」が伝える、クーデター派の反論の骨格は、慶喜にはこれまでの罪があるし、また彼の反正の真偽はいまだ明らかではない、それを見るためにはすぐに彼を招致すべではなく、辞官納地を受け入れるか否かでそれを確認することが必要だ、というものであったのである。

では、「丁卯日記」、「岩倉公実記」の何れを信じるべきだろうか。

まず史料面で検討する。『岩倉公実記』の典拠は不明であるが、会議に参加した当事者が、第二回小御所会議について記した同時代史料には以下のものがある。「丁卯日記」・「大久保日記」・前掲二月一二日付蓑田宛大久保書簡・二月二一日付藩庁宛大久保書簡（『大久保利通文書』〈史〉二、一三三、四頁）・二月一三日付松平茂昭宛春嶽書簡（伴五十嗣郎編『松平春嶽未公刊書簡集』、思文閣出版、一九七二年、七七頁）、先に引いた「嵯峨手記」・公家倒幕派に賛同する有志公家の一人の橋本実麗の「美麗卿記」（写本、東京大学史料編纂所蔵）である。そして、これらの史料はいずれも、容堂発言を不敬とする岩倉の一喝を記していないのである。⁽⁷³⁾

容堂がここで慶喜の即時開催を求めて激しい議論をしたことは、「丁卯日記」・「大久保日記」・藩庁宛大久保書簡・茂昭宛春嶽書簡・「実麗卿記」がこれを記していることに明らかなように、きわめて衝撃的なものであった。しかし、その容堂を「何ぞ其れ亡札の甚だしきや」と正面から叱責する岩倉の発言も同じように、あるいはそれ以上に印象的なものであったはずである（賢君として評判が高く、議定に任命されたばかりの、大藩の国主を下級公卿が公然の場で一喝を加えるなどということは前代未聞だろう）。そうしたことがあったなら、このうち何れかはこれを記して当然であろう。しかし、それにもかかわらず、これが記されていない。

次に議事の流れを見る。「不敬」と咎められそれに恐縮したのであれば、さすがの容堂でも意気は挫け抗論もおさまっていくはずであろう。また、「今日の挙は悉く宸断に出つ」という岩倉の叱責を認めたなら、慶喜の即時招致など宸断に反する主張は出来ないはずだろう。しかし、容堂は、岩倉の反論にもかかわらず慶喜招致論を屈することなくあくまで言い募ったことは、「丁卯日記」・「大久保日記」・「実麗卿記」が記すところであり、これを持て余したクーデター派は結局、会議の中断を余儀なくされたのである。

そしてこうした議事の進行は、実は『岩倉公実記』が示すものでもあった。『実記』においても、一喝のくだりは小御所会議の記述の流れの中で浮いているのである。

以上、一次史料、議事の流れの両面より考えるならば、『岩倉公実記』ではなく、「丁卯日記」が妥当であり、一喝の挿話は実際には存在しなかったと見るべきであろう。

では岩倉の叱責の挿話はいかにして登場したのだろうか。

明治政府の最初の修史事業である『復古記』は第二回小御所会議の史料（『春嶽私記』等）を収録しているが、そこにはもちろんこの挿話はない。その後、竹越与三郎『新日本史』（一八九一年）や勝田孫弥『西郷隆盛伝』（一八九四年）・指原

安三『明治政史』（一八九二年）などの史書が小御所会議の論戦を描くが、いずれも岩倉の一喝はない。そして注意すべきことに、『岩倉公実記』とほぼ平行して、明治政府（宮内省系）が進めていた修史事業であり、その少し前に完成した『三条実美公年譜』（一九〇一年）の記述も、「丁卯日記」と同様であり、一喝の挿話をふくんでいないのである。この挿話は『岩倉公実記』においてにわかに登場したものと見えよう。

『岩倉公実記』でなぜこの挿話が登場したのが。その編纂過程の分析は別になさねなければならないが、それが天皇の権威化に適合するものであったことは、指摘しておかねばならない。「如此暴挙企られし三四卿、何等之定見あつて、幼主を擁して権柄を窃取るせられたるや」（『丁卯日記』、二六〇頁）、との容堂の批判は、岩倉のみではなく、天皇権威にとつても突き刺さった棘である。しかし、この発言はすでに『復古記』で公のものとなっていたし、容堂が岩倉らへ痛烈な非難を行ったことはすでに見たように多くの史書が記し、もはや隠蔽することはできない。この傷口をいかにふさぐべきか。

岩倉の叱責、容堂の謝罪、という『岩倉公実記』の記述は絶好の対応となっている。これが加わること、この論戦の意味は逆転し、容堂の発言・謝罪は、批判しえない権威としての天皇の位置を逆に浮かび上がらせるものとなる。ここに災い転じて福と為ったのである。そしてこの像の拘束が現在までも及んでいることはすでに述べたとおりである。

しかし、小御所会議が行われた、慶応三年の天皇権威をめぐる現実の状況は、天皇を操り人形視する発言、後年よりすれば「不敬」とさえ見える大胆な発言をなしうるものだったのである。『岩倉公実記』の創った神話は解体されねばならないだろう。

2. 小御所会議の意味

辞官納地問題はこうして紛糾した。容堂・春嶽の激しい論難に薩摩・岩倉側はいったん休会を余儀なくされる。しかし、

再開した会議では容堂・春嶽は譲歩し、辞官納地の上表を出すよう尾越が慶喜に内諭周旋するという事前に予定されていた通りの決定がなされることになった。

なぜ容堂・春嶽は折れたのか。先に言及した『岩倉公実記』にいたる史書は、あくまで反対すれば殺害する決意であるとの恫喝を休憩中に岩倉が語り、それが後藤より容堂に伝えられた結果、譲歩となったとしている。前掲一二月一三日付松平茂昭宛書簡で春嶽が、「越・土両老侯極死にて及激論、薩土指我ならばさせ、死ても我魂は守護天幕する事と決心いたし候」と述べているところより、刺殺の恐れを春嶽は感じていたわけであり、この記述は信じることができよう。テロへの不安が譲歩をもたらしたのである。

会議のもう一つの議題は守護職・所司代の廃止、会桑の罷免であった。これを命じれば会桑が憤怒していかなる暴挙をなすかわからないという不安よりこの問題でも廟議は難航した（『丁卯日記』、二六一頁）。二節4で述べたように、薩摩にとり会桑罷免は絶対条件であり、今さら躊躇することはありえない。こうした不安を述べたのは、土尾越芸であったろう。新政府発足の日にしてすでに薩摩らクーデター派は廟議で十分な主導権を取れていないのである。

しかし、この会桑罷免の難題は、慶喜が自主的に会桑を罷免したことで解決した。クーデターの順調な進行は、慶喜の「協力」なしにはありえなかったのである。あくまで自重し衝突を避けるというのがこのときの慶喜の方針なのであった。⁽⁷⁵⁾

第二回の小御所会議は以上の通りのものであった。ではこの会議からいかなる政治的意味を読みとることが出来るだろうか。

新政府発足後の最初の廟議の議題は辞官納地と会桑罷免であった。一節で見たように、これらは最初、天降りの勅命として一方的に命じられる予定であったが、ともに廟議にかけられることになったのである。もつとも廟議にかけるといっても、それは形式であり、その結論は尾越の内諭周旋、会桑罷免となるであろうと薩摩や公家倒幕派は楽観していた。それは、八

日、薩土尾越四藩重役に明日のクーデターへの参画を正式に通知したさいに、これを既定事実として語っていることに明らかであろう（「丁卯日記」、二五五頁）。薩摩がクーデター計画を後藤にもちかけたさいに、このことは述べており、クーデターに参画する以上は、どういう形式でそれを命じるかは別として、これを認めていると見るのが自然なことであつたろう。それに、辞官納地はともかく、会桑罷免は「公議政体派」も望んでいたものであつたことはすでに述べたとおりである。

辞官納地・会桑罷免は第二回小御所会議前に合意が出来ていたはずである。しかし、実際にはこれで大議論となつた。その原因は容堂にあつた。容堂は八日に上京するまでクーデター計画を知らされておらず、彼にはそうした合意がなかつたのである。⁽⁷⁷⁾そのため会議の冒頭、容堂は、慶喜の即時招致という原点に遡つた議論を展開する。そしてその勢いに、すでに妥協してははずの春嶽や後藤もこれに同調し、合意はふりだしにもどってしまったのである。

こうして廟議は紛糾する。このような場合の切り札として思い浮かぶのは天皇Ⅱ「聖断」である。そしてこのとき岩倉らは天皇の身柄の確保には成功していた。しかし、それにもかかわらずこの札は切られていない。当時における天皇の政治的位置を示すものと言えよう。そして、結局、会議を決着に持ち込んだものは、刺殺Ⅱ暴力の恫喝であつた。

薩摩・岩倉はこうした非常手段によりなんとか会議を決着にもちこんだ。しかし、その決着は、もともと容堂以外にとっては合意済みのものにすぎなかつた。そしてその合意（内論周旋方式）は、まさに両者の妥協により成立したものであつて、一節で見たように薩摩側にとっては本来、不本意なものであつた。そして、実際、翌日以降、薩摩の危惧は現実のものとなり、辞官納地について次々と譲歩に追い込まれていくことになる。小御所会議は薩摩・岩倉側が主導権をにぎり十分な勝利をしめたものではなく、テロの恫喝により最初の妥協点をからくも確認したものだつたのである。

しかし、この暴力も実際には使用が困難なもの、極力、使いたくない武器にこの時なつていたと思われる。なぜなら、新政府発足後、その最初の廟議の場で、春嶽・容堂を刺殺したということになれば、天皇は握っていたにしろ、新政府の正当

性、権威は決定的に傷つくことになるからである。暗殺を行えば、内戦は必至であつたろう。もつとも薩摩倒幕派は大政奉還以前には内戦を決意していたわけであり、戦争を恐れてはいなかった。しかし、内戦は一面、諸藩の支持の獲得合戦であり、その初発でこうした文字通りの暴挙を犯してしまつては、土越のみならず同志と期待している西国諸藩（例えば、宇和島・因幡・備前）の向背も不明となるだろう。暴力は彼らにとつても極力避けたいものであつたはずである。新政府の発足が順調に進み、廟議が設立されてしまつた結果、強引な内戦突入策は、その破壊を意味し、正当性を失う。廟議の平和的樹立に成功したことで、かえつて内戦という最終手段に訴えることが困難になつてしまつたのである。

王政復古クーデターは新たな形の廟議の強行樹立策でもあつた。しかし、薩摩倒幕派にとつて廟議のもつ意味ははじめより微妙なものであつた。

クーデターへの準備がすべてなつたはずの八日、公家倒幕派に一波乱が起きていた。「大久保日記」によると、岩倉・中山は計画が漏れたのではないかと怯え、このため大久保は奔走、徹夜の説得に及んだという。そしてこの波乱のなかで、岩倉より薩摩側に緊急の尋問が行われている。それを示すのが、一節でも言及した、この八日付の薩摩倒幕派の有名な岩倉宛建言である。「前条預御尋問、尚修理太夫（茂久）趣意を奉し評決之形行、奉申上候」とあるように、この建言は、岩倉の「御尋問」にこたえたものののである（『大久保利通文書』〈史〉二、七五頁）。その尋問の内容は、この建言の趣旨より明瞭となる。慶喜に尾越が辞官納地の内諭を行つたとき、慶喜がすぐにこれを請けたなかつたときはどうするか、である。決行のまさに直前にこのような尋問をなしたことは、⁽⁷⁸⁾そうした事態が生じる可能性が高く、その場合どうするかが大問題であると、公家倒幕派が判断していたことを示していよう。

これに対し大久保らは本章一節で述べたように、絶対に譲歩すべきではなく、即時受諾以外は認めるべきではない、と主張した。そして、それがために戦争となつてもやむをえないとし、それを弁証する前提として、先にひいた著名な戦争論を

展開するわけである。

その切迫した口調、さらに、内諭周旋方式の採用は公家側の意向であったという、すでにふれた皮肉、これよりして、岩倉ら公家側がこうした妥協論をとる危険がある、と薩摩倒幕派側は恐れていたと見ることが出来る。

そして、注目すべきことは、この妥協反対論が、「太政官代三職之公論を以大政を議」して目的を達成するのは戦争よりも難しい、とあるように、公議機関＝三職会議を牽制する文脈のなかで語られていることである。三職会議は、薩摩がまさにこれからクーデターにより創出しようとしている新政府の核である。その廟議をなぜ警戒するのだろうか。新政府において三職会議はいかなる意味を持っていたのだろうか。

クーデターで発足する新政権は、本格的な天皇・公議政体樹立のための仮政府であり、そこにおいて公議機関の役割を代行するのが三職会議＝廟議であった。

新政府の議定に任じられたのは、一部の諸侯のみであった。しかし、その選定は完全に恣意的なわけではなかった。このとき在京していた有力国王は、薩土尾越芸、会桑、それに慶喜にすぎなかった。新政府はこのうち、会桑・慶喜を排除したが、それ以外の在京国王は網羅していた。そして、クーデター以後、上京した雄藩国王は議定に任命されている（一二月二八日には伊達宗城⁽⁸⁰⁾）。三職会議は、公議機関の先駆けという意味もつものだったのである。

公議機関の樹立は薩摩倒幕派の政治目標であった。しかし、樹立された公議機関が薩摩の思い通りになる保証はない。それどころか、主導権の確保、慶喜への打撃といった薩摩の権力衝動がそこで掣肘を加えられる可能性が高い。廟議＝公議機関への薩摩の対応はアンビバレントなものにならざるをえない。「太政官代三職之公論を以大政を議」して目的を達成するのは戦争よりも難しい、と先の建議が批判する所以である。

しかし、それにもかかわらず、廟議の持つ拘束力は薩摩を規制する。

先の建言での大久保らが危惧した通り、成立した三職会議は彼らの思い通りにはならなかった。まず第二回小御所会議の論争がある。続く翌一〇日の廟議も紛糾した。この日、春嶽・慶勝は慶喜のもとに赴くが、慶喜は辞官納地への返答を保留した。これに対しどうすべきか、今後の対応が廟議の議題となる。そして、そこでは、薩摩の反対にもかかわらず、さらに尾越に周旋させるという方針を決定した（『丁卯日記』、二六四頁）。薩摩倒幕派が恐れていた展開である。

こうした事態に一三日、岩倉は大久保に対し今後の方針として、以下の兩策の何れを選ぶかを問うた（『大久保利通文書』〈史〉二一、一三三、四頁）。すなわち、第一等、四藩（尾越土芸）の議論離合にかかわらず薩長の兵力でもって成敗を戦闘で決する策、第二等、尾越の周旋にしばらく任せる策。そして、大久保の返答は第一等ではなく、第二等であった。先の建言よりすればまったく意外な反応である。

大久保はなぜ第二等を選んだのか。その理由を大久保はこう語っている（同）。クーデターが「万事 叡断に出て一戦」という展開になっていたなら、第一等に出るほかないが、実際には小御所会議となり、そこでの激論の結果、内諭周旋が決定し、さらに一〇日の廟議では尾越が責任をもって周旋する言明している、こうなった以上いたし方なし、である。すなわち、政策決定の場として廟議が樹立され、その決定にもとづき事態が進行している以上、これを認めるしかないという判断である。このように、不本意ながらもその決定にしたがわざるをえない拘束力をもった存在として、廟議は捉えられているのである。

もつともこの前日の一二日の段階においては、慶喜は結局は、辞官納地を請けるだろうと薩摩倒幕派は判断しており、このことも譲歩の背景にあった。廟議よりも戦争をと主張し、戦争自体の意義を賞賛する先にひいた、建言の一節（四七頁）⁽⁸¹⁾は、薩摩倒幕派の政治路線を示すものとして従来よくとりあげられてきた。しかし、これは、辞官納地問題についての岩倉らの妥協を牽制するという政治的文脈のもとで語られたものであり、これをただちに彼らの真意とすることはできない。そ

してクーデターおよび、その準備の過程における実際の薩摩の行動については、彼らが戦争を挑発しようとしているわけではないことはすでに見たところである。彼らは戦争自体を目指していたわけではなく、天皇・公議体制の平和的な樹立は、薩摩倒幕派にとっても望ましいことだったのである。したがって、周旋への譲歩は、最善ではなく不満が残るものではあっても、我慢しうる範囲のものであったろう。

しかし、一四日以降この樂觀はしだいに崩れ、廟議は慶喜への妥協に動いていくと、薩摩は戦闘による決着を望むようになる。しかし、廟議の存在がそれを大きく拘束し、彼らは戦争への契機をつかめず苦悩することになるが、この過程は別稿で述べねばならない。

小 括

本章の内容を要約する。

第一に『岩倉公実記』批判。『実記』の描く王政復古クーデター像は、岩倉の参内による開始、天皇の一方的宣言である王政復古大号令による新政権の樹立、天皇權威を背景にした岩倉の一喝による小御所会議での「公議政体派」の抵抗の圧倒、というものであった。

しかしこうした『実記』の像は事実ではなかった。クーデターの開始は西郷以下の薩摩兵力の出動であったし、王政復古の大号令は天皇の一方的宣言ではなくクーデター参加者の評議（第一回小御所会議）をへたものであった。そして小御所会議での岩倉の一喝なるものは存在していなかった。『実記』が浮かび上がらせようとしているのは、天皇權威の絶対性と岩倉の貢献である。この神話は解体されねばならない。

第二はクーデターの政治的主導権の問題。クーデターにおける薩摩倒幕派の主導権は圧倒的なものではなかった。クーデターの立案過程では、慶喜への政治的打撃（彼抜きの新政権の発足、辞官納地）という基本性格を変わらなかったが、辞官納地の内論周旋方式への変更、新撰組・見廻組への攻撃の削除などかなり大きな修正が薩摩側の意向を抑えて行われている。そしてこの計画変更の決定権を持っていたのは公家倒幕派であった。またクーデターの実行にあたって、「公議政体派」は、クーデターの情報を後藤によって事前に内報されており、それを徳川保守派、あるいは摂政ら上級公卿に知らせることで、薩摩の計画を阻止、すくなくとも阻害できる立場にいた。そして小御所会議（第二回小御所会議）で薩摩側をきびしく追いつめている。結局、薩摩側はテロの恫喝により、会議で彼らを屈服させるが、それで勝ち取ったものは、事前の不本意な妥協点（内論周旋方式による辞官納地）の確認に過ぎなかった。クーデターは、薩摩倒幕派の専断ではなく、合作クーデターであったのである。

第三に正当性原理について。以上のクーデターの実像より浮かび上がるのは天皇原理の限界性である。クーデター参画の密勅は出されたが、「公議政体派」諸藩がこれに参画したのは、密勅の権威ではなく、事前の根回しでそれを了承していたからであった。新政権の発足を述べる王政復古の号令は天皇の一方的命令ではなく、参画者の評議で決定された上で、天皇が発布したものである。そして小御所会議においては、天皇の権威をも批判するきびしい発言がなされ、しかもそれが咎められない状況であった。公家倒幕派・薩摩倒幕派は天皇の身柄を抑えること（奪玉）に成功しており、天皇原理が圧倒的なら、聖断という切り札で事態を進めることができるはずであった。しかし、それは切られず、政策決定の場はあくまで廟議にあったのである。結局、クーデターにおいて優位を占めたのは、天皇原理、公議原理のうち後者、公議原理であったのである。

結語 天皇原理と公議原理

最後に本論の検討をふまえ薩土盟約から王政復古クーデターにいたるまでの正当性原理について論じることにする。本論の要約については、各章の小括で行っている。

薩摩倒幕派の挙兵決意から大政奉還上表までの時期において、幕府批判の原理的根拠となったのは、天皇原理と公議原理である。しかし注意すべきことは、武力倒幕計画と大政奉還建白では、両原理の比重の置き方が違うことである。すなわち、討幕の密勅では慶喜誅殺の根拠となっているのは、天皇への不忠不敬であり、公議原理にかかわる文言は出てこない。そして武力倒幕計画の立案過程において、その参画者が何よりも注意すべきとするのは天皇の身柄の確保（奪玉）である。⁽⁸²⁾ 天皇の身柄争奪戦としての幕末政治史の像はこうした部分から生まれたものである。一方、土佐の大政奉還建白では、二重政権の解消、政権の朝廷への帰一、公議機関の樹立がうたわれているが、不忠不敬といった議論は出てこない。

なぜこのような差が生じるのだろうか。それぞれの担い手である薩摩倒幕派と「公議政体派」の思想的な差異だろうか。しかし、前者も公議原理を重視し、その拘束を強く感じていたことはⅡ章で見たとおりであり、ニュアンスの差はあったとしても根本的な差をこの段階の彼らに見出すことは無理だろう。

では何が理由か。それは結局、手段の差に基づくと言えよう。武力倒幕計画は本論で見たように全国的内戦を予想したもので、奪玉に成功しても天皇は京都で新政権を樹立するわけではなく、西方の根拠地に逃亡することになるだろうと考えられていた。こうなると公議機関の樹立など内戦終了までは無理なこととなる。内戦において必要なのは、旗印である。かかるものとして天皇があり、その確保が何よりも重視されたのである。そして内乱計画者の側でも、天皇は万能でありこれを握れば十分と意識していたわけではなかった。⁽⁸³⁾

大政奉還が行われると天皇原理と公議原理は幕府への批判原理ではなく、新たな政体樹立の体制原理となる。そして公議機関である諸侯会議開催に向けて朝廷より諸侯へ召集命令が出される。二つの正当性原理がまさに合体した命令である。しかし、事態の推移に不安を感じた多くの諸侯は召集に応じなかった。正当性原理の限界である。

このため新政体樹立への展望は見えなくなり、政局は混迷する。こうしたなか、十一月末、薩摩倒幕派の挙兵計画構想と後藤の諸侯会議即時開催構想が対抗するようになる。前者は大政奉還前と同じく、全国的内戦を予想するもので奪玉に最大の注意がはられていた。一方、後藤の構想は議事院設立の前に廉前誓約という天皇権威による正当化の手順をおいているが、その核は公議機関の早急な樹立にあった。大政奉還前と同様の対抗がふたたび生まれたのである。この対抗は薩摩倒幕派の勝利に終わる。しかし、彼らの計画も当初のものとは変化していた。全国的内戦突入策の部分は削除されたことで、クーデターは軍事力による公議機関の強行樹立策という二つの原理が併存したものとなっていたのである。

一二月九日、発足した新政権は二つの原理に支えられたものとなる。そしてこの両原理のうち優位を占めたのは、Ⅱ章で見たように公議原理であった。慶応三年後半における正当性原理のありようはこのようなものだったのである。⁽⁸⁴⁾そしてそれは、孝明朝末年以降の天皇の権威の低下、公議政治の理念の上昇という機運のもたらしたものであった。

では次に、正当性原理自体が持つ限界について見ることにする。

一二月下旬以降において公議原理にしたがって事態が推移していくなら、そのもつとも自然な帰結は、後藤や中山が考えていた新政権構想、慶喜をはじめからふくんだ天皇・公議政体の樹立のはずであろう。公議原理が優位をしめていたのに、なぜこれが実現せず、逆に、慶喜を排除した薩摩の構想が実現したのだろうか。

一つの要因は偶然的なもので、後藤がその構想を推進するにあたって戦術を誤り、公家倒幕派への工作を後回しにしたことである。しかしこれは決定的ではない。第二回小御所会議でまだ逆転の可能性があったからである。そしてこの可能性を

潰したのは、薩摩のテロの恫喝、暴力の契機、にある。薩摩の武力行使への不安が、容堂以下に小御所会議での妥協を導いたのである。そしてこのことは、政治における正当性原理の限界を示すものでもある。当然ながら、正当性原理が政治過程のすべてを規定するわけではないのである。

しかし、逆に暴力のみで、政治過程が動くわけではない。安定した政治体制を築くには正当性原理のよる支えが不可欠である。薩摩は、クーデター直前において、これから設立する廟議（公議機関）が自分の思い通りのものにならない可能性があることを承知しており、そこで妥協するよりは戦争に訴えるつもりであった。しかし、それにもかかわらず、クーデター後、そこでの妥協の動きにしたがうことになる。薩摩も一方では、正当性原理に大きく拘束されていたことはすでに述べたとおりである。暴力と正当性、その相互のバランスは一般論ではなく、まさに具体的な分析のなかで確認して行くしかないものである。そして本稿は、まず薩土盟約から王政復古クーデターの段階についてそれを明らかにした。発足した王政復古政府のもとでそれはどのようなようになるのかは次に明らかにすることにする。

注

(1) 井上勲・尾藤正英・三谷博・宮地正人・原口清氏らの研究を念頭においている。

(2) もっともこの「公議政体派」という呼称には、問題がある。この慶応三年後半の時期において、公議政体、正確には天皇・公議政体を樹立しようという考えは、一般的なものとなっていた。とくに大政奉還以後においては会津・桑名など徳川保守派以外はすべて公議政

体論者と言っている状況であり、特定勢力の呼称としてこれを用いるのは、あまり適切ではないのである。しかし、彼らが公議政体の樹立にとくに積極的であったのは事実であり、またすでに研究史において市民権を得ている呼称なので、ここではこれを使うことにする。

(3) なお原口氏はその後、「高次の全国的領有権の統合」＝廃藩置県についての理解を大きく転換されており、当然、両派の関係についても、旧著『戊辰戦争』より変わっているのではないかと推測する。一九八

○年代以降の氏の一連の維新史研究を総合する著作がまたれる。

(4) 四侯会議出席にあたり久光は多くの兵員を率いてきており、この時、在京薩摩兵力は約四千人であった(『防長回天史』五篇下、三四八頁)。この在京兵力が挙兵への決断の背景になっていた。

(5) 本文で述べたように、八月一四日、薩摩側が長州側に行った挙兵計画の説明は長州の使者だった柏村信の日記に記されている。そしてその説明のなかに以下の奇妙な一節がある(『防長回天史』五篇下、三四九、五〇頁)。

遂げ候程は万々無覚東候得共、打破る丈け之事は且々出来可申歟と存候。

弊藩に於て討幕は不仕、事を挙候已後、時宜に寄り討將軍之論旨は可被差出歟、是は御同志之堂上方より粗御内意探索仕候儀も有之候

問題の一節とは、傍点部の「弊藩に於て討幕は不仕」である。このくだりにいたるまで薩摩倒幕派が説明していたのが、幕府への武力行使計画であることを考えるとこの発言は矛盾しているように見える。したがって、この奇妙な発言の解釈は研究史の一論点となった。

遠山『明治維新』は、これを「政権を独裁する將軍を討つので、封建領主としての徳川氏を滅すのではない」、と解釈したうえで、これは一領主としての徳川氏と、全国統一者としての幕府との混同であり、こうした混同が生じたのは、「倒幕が、政治機構自体の変革ではなくて、徳川氏の権力をどれだけ削るかという程度問題としてのみ意識されていたからであろう」(一二七、八頁、傍点原文)とする。また、家近良樹『幕末政治と倒幕運動』(吉川弘文館、一

九九五年)は、「挙兵を討幕府を目的とするものではない、もしくは討幕府を徹底的にやるつもりはない」の意と理解し、薩摩の挙兵の当面の打倒対象が幕府本体ではなく会津であったことがこの発言の背景にあるとする(二二二、三頁)。

両氏ともに、「討幕」発言を、薩摩側が戦闘対象の限定の意図を示したものと解している。しかし、本文で見たように実際の薩摩の挙兵計画は、將軍であり徳川氏の当主である慶喜をはじめとする幕府首脳部が上方にいるなかでの、上方徳川勢力への一斉攻撃であり、徳川側の全面的反撃が当然、予想されるものである。戦闘対象の限定など薩摩側にとつてとても想像できるものではなかったろう。

ではこの一節はどのように解すべきか。

「討幕」「討幕府」という言葉は当時において多義的であり、これのみより解釈することは難しく、前後の文脈のなかでこれを理解する必要がある。この一節の前の段落で薩摩側は、対徳川戦争をやり遂げるのは困難だがその口火を切ることはできる、と述べているが、これは薩摩側の謙譲の表現であるとともに、長州など他藩への期待を表明したものであり、この会談の他の箇所でも同じ趣旨が述べられている(「素より勝敗は予期すべからず、弊国斃候時は、又跡を継候藩も可有之と夫を見詰に一挙動仕候心算に御座候」、『防長回天史』五篇下、三四八頁)。これより考えれば、一節の「討幕」とは、上方での挙兵で口火を切った以降の対徳川全面内戦のことであるように思われる。

次にこの一節の続きを見れば、それは討將軍の論旨についての見通しである。なぜここでこれが言及されるのか一見、奇妙に思えるが、挙兵後行われはすの対徳川全面内戦について論じられていると

考えれば、それも自然となる。すなわち、内戦の名分の問題である。(なお現実の討幕の密勅は挙兵前に出されたが、それは失機改図という予想外の事態に応じたものであって、討幕の勅語は本来は、挙兵後に出される予定のものであったことは、すでに拙稿A論文で述べたところである)。

以上より先の一段落を解釈すれば以下のようになる。すなわち、薩摩の力では戦争の口火を切ることはできるが、全面戦争をやりとげることまではできない(「弊藩に於て討幕は不仕」)、「後の全面戦争は長州など他藩の力を期待するが」、戦争の名分に必要な綸旨については挙兵後、入手できるように薩摩側が同志の公卿と協議して手配している、である。

(6) なぜ薩摩が盟約を結んだかについては多くの見解があるが、家近前掲書、第五章第二節一1がそれを整理した上で、武力倒幕戦術説をあらためて説得的に論証している。

(7) なおここにいたるまでの薩摩の政治路線はいかなるものであったのか。これについて、ここで瞥見しておくことにする。

文久二年の久光の率兵上洛以降の薩摩がめざしていた政治体制改革とは、国家意志の最高決定機関としての幕府を否定し、天皇を中心とする新機構にそれを移すことであり、これの実現が薩摩の一貫した目標であった(政治体制論の次元での倒幕)。新機構を頂点とする新政体において徳川氏をいかに位置づけるかは時期により変化するが、A型からB型へと、徳川氏とくに慶喜への期待が薄れるのに応じて、次第に移行していったと言えるよう。

薩摩はこうした政体の実現を目指した。そして幕府が新政体への移行を平和的に応じることを望んでいた。しかしこうした徳川氏へ

の平和路線は、慶応二年一月の薩長盟約で転換する。この盟約により、政体の移行という目的を達成するための手段として、徳川勢力に対する軍事力の行使が視野に入ったのである。言いかえれば、薩摩はその目標実現のために、平和的手段のみではなく、軍事的手段の行使をも決意したのである。ただ、ここにおいても武力行使はあくまで手段であり、それをなすかいは、幕府側の出方への薩摩側の判断によっていた。以後、薩摩の行動はこの路線で延長あり、慶応三年の前半は平和的移行の可能性があると考え、平和路線(四侯会議)を進んだが、兵庫開港勅許後はそれを不可能と判断し、挙兵路線に転換したのである。そして大政奉還で平和的移行の見通しがたつとそれを歓迎した。以上については別稿で詳しく述べることにする。

(8) 「然れとも若し行はれずんは其時薩論の如くするとも未晩也と、此議には薩論も逆ふ不能様子也、宇和島、芸州、越前等勿論同意なり、吾藩の果激家も此論には不抗」(「寺村日記」、二三頁)。

(9) 当時、土佐京都藩邸には毛利恭助のような土佐武力倒幕派がいた。一〇月六日、情勢探索に訪れた宇和島の都筑莊藏との会談に毛利は後藤とともに同席したが、そこで彼は拒否の場合は挙兵するとの意向を後藤の目前で述べた(「何れ此度は斯迄決心及建言候故、必御採用可有之、若採用無之候節は最早此限之事に存候」以兵力压倒之、一〇月二四日付都筑報告書、『宇和島伊達家史料』(「東京大学史料編纂所蔵写真本」一〇三)。また土佐の国元でも出兵論が高まっていた(「御国余程出兵論に被迫推政府動揺云々」、「神山日記」一〇月一〇日)。こうしたなか、建白が拒絶されるといふ屈辱を彼らに大人しく甘受させることなど、後藤にとりほとんど不可能事に見えただろう。

(10) 後藤の同志福岡孝弟は一月九日の松平春嶽への談話でこうした趣旨のことを語っている(『丁卯日記』、二二四頁)

(11) もちろん、この構想提唱の背後には、それにより政治的発言権を拡大しようという後藤、そして土佐藩の個別利害が存在していたろう。当時の土佐藩の政情、そのなかでの後藤の立場については、井上勲「大政奉還運動の形成過程」一、二(『史学雑誌』八一―一一、一二号、一九七二年)、参照。

(12) なお、後藤は、大政奉還後に慶喜を関白にするつもりであったと記している史料も存在している。それは、八月三日に京都より高知にもどった佐佐木高行が記す、武力倒幕派の乾退助の発言である(『保古飛呂比』二、東京大学出版会、一九七二年、四三三、三頁)。しかし「京師にて後藤、前將軍を関白に任ずべしと申立てたる由」(同書、四五六頁)、とあるように、右の情報は、乾が直接、後藤から聞いたのではなく、伝聞である。そして後藤が上京した六月十三日には乾はすでに土佐に戻っており(同書、三九七頁)、京都における後藤の活動を直接知っているわけではなく、この情報の信憑性は高いものではない。事実、六月二日に上京した後藤の大政奉還運動を実際に知っている佐佐木は、乾のこの情報について、「僕は未だ聞かず」(同書、四三三頁)と信用していない。

(13) なお『伊達宗城在京日記』の同日条によれば、この日、土佐の由井猪内が宗城を訪れて、安芸の小林柔吉が酔って拳兵論を語ったのを福岡孝弟が咎めたとの話しをしている。そしてそのあと訪れた大久保に対して、宗城は、軽率に拳兵のことを吐露したりしないよう、小松より戒示することを求めており、薩摩の拳兵の動きに宗城はかなり好意的な対応をとっているのである。

(14) 以上、『寺村日記』・前掲『保古飛呂比』二、四三三頁。

(15) 九月一日付山県有朋宛品川弥二郎(当時、京都薩摩藩邸に潜伏していた)書簡(『防長回天史』五篇下、三四五頁)。

(16) (17) 九月一六日付田尻務・蓑田伝兵衛宛大久保書簡(『大久保利通文書』(史)一、四八九頁)。

(18) 長州が薩摩の拳兵決意を聞かされたのは六月一六日、薩摩京都藩邸においてである(『防長回天史』五篇下、三二九頁)。このあと薩摩は土佐の大政奉還構想にのり、薩土盟約を結ぶ。盟約は長州に知らされたが、その核となる拒絶↓拳兵のシナリオの十分な説明はなかったと思われる。このことは八月六日付の品川弥二郎宛伊藤博文書簡(春畝公追頌会編『伊藤博文伝』上、一九四〇年、二九九頁)の以下の一節に確認できる。

是(後藤の主張)は勝負一決之上ならでは、口舌上にて被行候儀、毛頭有之間敷と愚考仕候

「口舌上には被行」ないこと＝慶喜の建白拒否は、まさに薩摩の予想であり、盟約のシナリオであったが、それを伊藤は理解していないのである。

盟約のシナリオは薩摩側が長州に説明したのは、八月一四日、薩摩京都藩邸における柏村・御堀への説明においてである(『防長回天史』五篇下、三五〇頁)。しかし、柏村が国元に戻ったのは、二四日であり(同書、三五三頁)、二〇日に長崎で竜馬・佐佐木と会ったとき木戸はこのシナリオをまだ知らなかったのである。

(19) 「後藤君御上京に相成候は、不日大御公論天下に相立可申、其末乾君之御上京誠以御都合之次第と奉感伏候」。乾退助の上京とは出兵を意味する。

(20) ただし、木戸はその後、後藤の不帯兵に危惧を感じるようになり、九月四日付の竜馬宛の書簡(『木戸孝允文書』〈史〉二、三三四頁)で乾を早く上京させるよう(「乾頭取は此後は西吉座元(西郷)と御同居位にても可然」)主張している。

(21) 後藤の議論は挙国一致を説くものであり、それが有効性をもつには、単に「公議政体派」だけではなく、武力倒幕派の信用も得ることが重要であった。彼の建白構想が武力倒幕派にとっても十分、支持できるものであったことはすでに述べたとおりである。しかし、その信用は、不帯兵の結果、地に落ちてしまった(『寺村手記』、四九三頁)。

(22) もっともこの大久保の談話では、後藤はすでに国元に出兵を申し送っていることになっているが、これは事実ではなかった。後藤の二枚舌である。しかし完全な虚言ではなく、やはり出兵させようという意図はあったと思われる。京都状勢の説明のために寺村左膳を帰国させることを九月一六日、京都藩邸は決定しているが(『寺村日記』、三七頁)、以下の宇和島国元への報告にあるように、寺村の使命には兵隊の呼び寄せがあったようである(「象次郎御話に、昨五日寺村左膳帰藩、同人帰着之上は御人数登京仕候趣」(一〇月六日の宇和島都筑への後藤談話、前掲註(9)一〇月二四日付都筑報告)。

(23) 土佐からの問い合わせに答えて小松は、大久保が長州に着く日より一五日から二十日目に挙兵の予定であり、長州の賛否にかかわらず薩摩は挙兵の決意であると述べている(『寺村日記』九月一九日)。西郷も一〇月五日までには挙兵する予定と二三日、福岡に語っている(『寺村手記』、四八四頁)。さすがに挙兵予定が切迫した九月末頃よりは情報の秘匿、誤情報による操作を行っているようであり、

すべてを明かしているわけではないが、相当な程度まで情報を伝えているとは言える。

(24) 当時、京都藩邸にいた薩摩倒幕派の幹部の一員で、大久保の義兄の新納嘉藤二は、即時挙兵に反対し、建白を慶喜が拒否すれば、天下の人心はいっそう離反する好機会が生じるので、そのときにこそ挙兵すべきと論じている(一〇月五日付新納書簡、『大久保利通文書』〈立〉五、一二八頁)。

(25) 薩摩の藩情も複雑で倒幕派一色というわけではなく、当時の京都藩邸にさえも反対派は存在していた。そして土佐側が工作した対象は高崎正風であった(『寺村日記』、四〇〇四二頁)。

(26) 「建白書提出を」差止め候ては(「容堂の」御趣意も貫徹不致訳に付、象次郎大に憤発、明日より打掛り何迄も西郷を弁解可申段に相決」(『寺村手記』九月二三日、四八五頁)。

(27) 九月二九日付大久保宛西郷書簡(『大久保利通文書』〈立〉三、三三九頁)。ただしこの返答が土佐側に届いたのはなぜか一〇月二日であったが(『寺村日記』、四二頁)。

(28) 「神山日記」一〇月一日。なおこの小松の内談の意味については拙稿A論文、三三、三頁参照。

(29) 「後藤・福岡、西郷へ逢に行、著京初て也。帰に我宿へ兩人共来る。同論のよしにて先安心す」(『神山日記』一一月二八日)

(30) 「嵯峨手記」一一月二七、二九日、一一月二八日付大久保宛岩倉書簡(『大久保利通文書』〈史〉二、五〇頁)

(31) 「如組、立ならては難復古のこと、一来月七日開港(兵庫開港)期迄に、断然ならては不済のこと」(一一月二九日、正親町三条の中山訪問の前に、大久保が正親町三条を訪れ、薩摩のクーデター構想

への賛同を求めているが、その中での大久保の発言、「嵯峨手記」三九頁）。

- (32) 「一撰公申承、一尾建白無所存、早々可被行のこと」(「嵯峨手記」一月二四日)とあるように、尾張に何らかの建白を行う動きがあると当時、見られていた。

- (33) なお中山の動きについて多田好問編『岩倉公実記』中巻(一九〇五年)は以下のように記述している(二〇八頁)。諸侯会議即時招集構想を知った中山・正親町三条は摂政に諸侯会議の早期召集を求めたが、摂政は応じず、近日、辞任する意向を表明した、である。つまり岩倉は、摂政の追い落としではなく、摂政による諸侯会議の早期召集をまず望んでいたとするのである。『岩倉公実記』の例にもれずこの史料の根拠は示されていない。しかし、「嵯峨手記」によれば、これが成り立たないことは本文で述べたとおりである。

- (34) ただし、中山がその構想を考案するにあたりまったく「公議政体派」諸藩と接触がなかったわけではないと思われる。なぜなら摂政追いつ落としてのきっかけとして尾張の建白が挙げられている以上、尾張側と何らかの接触はあったはずだからである。この時期の尾張京都藩邸の重要史料としては『尾崎忠征日記』(史)があるが、それにはそうした接触をうかがわせる記述はない。しかし、同藩の林左門らは、上層公卿の王政復古諮問案への対抗をめぐって十一月半ばより公家倒幕派とともに動いており、その線でなんらかの接触があったのではないだろうか。しかし、こうした中山―尾張の線は、後藤にまでつながらなかったように思われる。

- (35) 討幕密勅策動を行ったことが、公家倒幕派同士、さらには彼らと薩摩倒幕派の凝集力を結果として高めたことは、井上勲『王政復古』

(中央公論社、一九九一年)、二四五、六頁参照。

- (36) 一月二七日付中山宛岩倉書簡(『岩倉文書』(史)三、三八二頁)。

- (37) なお諸侯会議即時招集構想の挫折の要因について原口「王政復古小考」(『明治維新史学会報』三七号、二〇〇〇年)は、本稿と同じく、公家の動向に要因を求めている。ただ、氏の場合、公家倒幕派ではなく、二条摂政の動向にそれを見る。すなわち、摂政が辞意を表明し、平和的諸侯会議召集が絶望的になったことに挫折の要因を見るのである(一四頁)。しかし、後藤が会議召集を期待した公卿は公家倒幕派の議奏正親町三条であり、二条摂政ではないことは、本文で述べたところである。そして後藤にとって摂政はむしろ打倒の対象であり、その辞意表明が彼の構想にとって有利なものであることは、以下に確認できる。すなわち、薩摩の構想に合意以後の正親町三条・中山に対して、大久保は、後藤との会談のさいには、彼が動揺しないよう、摂政は決して辞任しないと話すよう依頼しているのである(「其節撰辞辺のこと、決して無之、断然確乎にて、不被談は、彼(後藤)如何のこと」、「嵯峨手記」一二月三日)。摂政が自ら辞任しない以上、それを実現するには武力クーデターが必要となるのである。

- (38) 井上勲前掲書、三一〇頁・家近前掲書、二四四―二四六頁・原口前掲「王政復古小考」、一四頁。なお原口氏の見解については、前註で論じた。

- (39) 下山三郎『近代天皇制研究序説』、岩波書店、一九七六年、二〇、二三、二四頁。

- (40) 「一御決策相立候は、一発前夜御微行之方可宜哉之事
一炮声相発し候節に臨み堂々と鳳輦を被移候方可宜哉之事(以下略)」

(西郷隆盛筆協議書、『楫取家文書』〈史〉一、三九五頁)。

- (41) ただし、遠山氏自身の見解について言えば、氏はこの時期の公議政体論をほとんど評価しておらず(「議会制度論は、専ら封建支配者間の対立を緩和し、封建支配秩序を再建する手段として、受け取られたのである」、『明治維新』、九二頁)、圧倒を云々する以前にそれ自体、限界をもつものとして理解している。

- (42) 『岩倉公実記』の編纂については、大久保利謙氏による同書復刻本解題参照。また明治国家の修史事業については田中彰『明治維新観の研究』(北海道大学図書刊行会、一九八七年)、第四章、参照。

- (43) (44) 二月六日付松平茂昭宛松平春嶽書簡(伴五十嗣郎編『松平春嶽未公刊書簡集』、思文閣出版、一九九一年)、七七、八頁・「神山日記」二月五日。

- (45) 「固(中山)談、一大く(大久保)談、各申入候、来五日於山第、後藤面、已刻迄可行こと、一同上手順草、令一見のこと」(「嵯峨手記」二月三日)。

- (46) ほかに『中山忠能履歴資料』〈史〉九にも計画草案が収録されており(六三―一二二頁)、その内容は、「岩倉家蔵本写 王政復古発令一件 全」と多く重なる。計画の原史料の所在は現在のところ確認できないが、両文書に収録されていることは、当時、岩倉家・中山家それぞれにほぼ同じものが現存していたことを示している。

- (47) この草案は、クーデター当日、摂政・両役・慶喜を召すとするとともに、クーデターに参画する藩の一つとしてして備前を挙げている。このことより、有志公家・諸侯(薩尾越土芸)のみで御所を制圧するというクーデターの基本構想がまだ固まっていな、ごく早い段階のものであると推定することができる。

- (48) 時期の推定は以下による。この写本には複数の計画案がふくまれているが、王政復古大号令がいつの時期に復古すると述べているかという部分に注目すると、他の草案が「中古以前」としているのに対し、この草案は、「神武創業」であり、これが最も新しいことが明らかとなる。そして、薩土尾越四藩藩主への参朝命令の部分のうち、土佐に対してのものは、容堂延着を理由に後藤が名代を命じられていた。五日上京のはずの容堂の延着がクーデター準備過程で問題となるのは、二月五日から七日の間であり、これはその間に作成されたものであると思われる。

- (49) 「慶喜え 御沙汰之趣 尾越御使にて演舌と雖も大綱廉一紙如何、尾越復命之後慶喜進退断然御一定被 仰下之二紙」。

- (50) 春嶽・慶勝は議定就任が予定されている重要人物である。もし廟議をへずに彼らを二条城へ派遣するなら、彼らが御所にもどるまで最初の廟議は開けなくなるだろう。

- (51) なお摂政以下の謹慎処分削除の意味についてはまた別に明らかにする。

- (52) 中山がクーデターへの参画を決意して以降も内戦回避に熱心だったことは、『中山忠能履歴資料』〈史〉九所収の彼のクーデター計画についての覚え書き(一二六頁)に示される。そのなかで彼は、「何方へも兵を不被動と申事徳(慶喜)始へ速布告事はいか、事」と提案しているのである。

- (53) 家近前掲書、二五一―二五五頁。

- (54) クーデター当日、会桑は結局、動かなかった。これについて西郷は二月一日付の蓑田伝兵衛宛書簡(『西郷隆盛全集』2、大和書房、一九七七年、三一九、二〇頁)で「前以ては会・桑より暴発い

たすとの説喧敷事にて御座候得共、其の時に臨み候処、案外氣おくれいたし」云々と述べている。しかし、挑発が外れたとして残念がつているわけではなく、平和解決に向け進められている慶勝・春嶽の周旋について、「尾・越の両藩至極の周旋に御座候故、多くは静まりそうな模様に御座候」とこれに期待を示している。また、大久保も「二月一日付蓑田宛書簡（『大久保利通文書』〈史〉二、九〇頁）」で尾越の周旋に対して、「奉感伏次第に御座候」とした上で、「必定会桑を帰国せしめ候」と好意的に見ているのである。

(55) なお辞官納地が大大名としての徳川氏の抹殺にかならずしもつながるものではなく、合理的な根拠があるものであることは家近前掲書（二六二頁）が指摘している。また拙稿B論文二〇頁参照。

(56) 原口前掲「王政復古小考」、一五頁。

(57) なお「丁卯日記」が記録する岩倉のこの説明では、「御書付」の申し渡しがこれで終わったのか、九日寅一点にあらためて正式に申し渡しつもりだったのか判然としない。しかし、すでに書付を交付しているのをまた呼び出し同じものを交付するとは考えにくく、岩倉が考えていたのは前者だろう。つまり、「未発之御密旨」により参内が命じられたのである。

(58) 茂久・容堂参内の時刻は、二月一二日付蓑田伝兵衛宛大久保書簡（『大久保利通文書』〈史〉二、八七、八頁）による。

(59) 山内家史料刊行委員会編『山内家史料幕末維新』、第七篇、山内神社宝物資料館、一九八五年、二九三頁。

(60) なお容堂が不本意ながら参画を了承したのは、上京がおくれたため、「此内議に御遅れに成、致し方無之」ということ（『寺村日記』、五九頁）、つまり、自分の上京が遅れたため内議に参加できず、段取

りがここまで進んでしまった今となつては仕方がないというものであった。

(61) 二月一日付蓑田宛西郷書簡（前掲『西郷隆盛全集』2、三一八頁）

(62) 春嶽「逸事史補」（同書刊行会編『松平春嶽全集』一、一九三九年）、三一二頁。

(63) クーデターにおける禁門制圧の重要性については、家近前掲書、二五五―二六〇頁・井上勲前掲書、三三四―三三八頁、参照。

(64) 端山会『維新土佐勤王史』、一九一二年、一二五九頁。

(65) 註（54）。

(66) なお、『岩倉公実記』は、クーデターの最初の一步を岩倉の参内として記している（中巻、一四六、七頁）。すなわち、摂政退朝の報を已刻（午前一〇時頃）受けた岩倉が参内、前日より御所にいた中山・正親町三条、それに岩倉に遅れて参内した中御門とともに天皇の許に伺候し、王政復古の大策断行を上奏した、としている。そして彼らの参内・上奏は西郷以下の到着前とされており、兵士が来ないのでそれを促すために送った使者（岩倉具定）が清所門で西郷以下薩摩兵と出会うことになっている。

しかし『大久保日記』では具定が出会ったのは、茂久一行であつて、西郷以下の兵力はそれ以前に御所に入っている。また、本文ですぐ後に引用する「嵯峨手記」でクーデターの最初の記事は、「五はん兵士追々繰込」であり、また、岩倉の参内、上奏の記事はなく、岩倉もその一員である「有志堂上」の参内については、薩摩兵が衛宮の守備体制に入つた後としている。

以上より、まず岩倉の参内があり、彼の上奏の後に武家が出動す

という『岩倉公実記』の記述は信用できず、実際は、八日より御所にとどまった同志公家の通知を受けた西郷以下の御所進入がクーデターの最初の一步であったと見る事ができよう。

(67) なお九日の経過の細部(いつの段階で三職人事が発令されたか)については、廟議参加者の記録に差異があり確定は困難である。

(68) ただし、この手順は薩摩の当初からの計画ではなかったろう。前節で言及した、摂政・慶喜をも召集するごく初期の案においては、評議がなりたつと思えず、新政府は天降り式に発足することになっていたはずである。これが実際の、評議先行に変わったのは、慶喜に対する評価が高まり、会桑との衝突はあっても徳川勢力との全面的武力対決がないと判断され、平和的に事態が推移する可能性が高まったと薩摩はじめ参画者が判断したからだろう。

(69) なお、これまでの通説は『岩倉公実記』を踏襲し、大号令に先行する評議の存在を無視するものであった。ただ、管見の限り、井上清氏が正しい事実認識を示している(『明治維新』、中央公論社、一九六六年、九頁)。しかし、このことが持つ意味については、氏は気づかれていない。

(70) 「会桑二藩も、朝廷より免職之御沙汰に可相成、御評議有之」(「丁卯日記」、二五九頁)。

(71) なお『中山忠能履歴資料』(史)九所収のクーデター計画の草案類には、一節で言及した五日頃草案よりさらに新しいと推定しうるものがある(七三〜九五頁)。これの大号令の部分は、五日頃草案とほぼ等しいものとそれへの訂正よりなっている。そして、廃絶条項(七八頁)については、「此処跡より加筆」という側註の横に「(守護職所司代)」とある。かりにこれを五日頃からクーデターまでの間の

加筆と考えれば、決行のまさに直前に追加が行われたということになる。

では、この追加された大号令が実際に接見のさいの大号令となったのだろうか。こう解するのは、会桑罷免が第二回小御所会議の議題となり、さらにそれが紛糾したことより無理だろう。クーデターの直前、会桑罷免を廃絶条項にいれる案が作られたが、結局、実際の

(72) 「不論既往、更始一新」の挿入。和宮帰京条項の削除。ともに慶喜に有利な修正である。

(73) ただし、一喝を記した参加者の史料がないわけではない。このとき議定に任じられた安芸の世子、浅野茂(長) 勲の回顧録、平島益雄編『天皇親政と小御所会議の実説』(『芸備二州叢書』四、一九三〇年)である。それは以下のように記している。

山内豊信は前説を固く取つて激論に及び、天皇陛下に対し不敬の言もありたれば、岩倉卿大喝一声山内豊信の不敬の言を叱責したれば、山内豊信其不敬を謝せり。

しかし、この回想の信憑性は低いと思われる。まず、第一にこれが同時代史料ではなく、はるか後年のおそらく一九二一年の回顧談であることである。茂勲の命により編纂され一九〇九年完成の『芸藩志』(文献出版、一九七八年)の小御所会議の記述(十三卷、四二頁)では、容堂と岩倉の論争を記しながら「不敬」発言と一喝のくだりはないのである。

さらに、政治的歪曲の可能性があること。例えば、辞官納地の議論のさいの自分の立場についての回想である。これについて茂勲は、自分は岩倉に与し論争したと述べている。しかし、「丁卯日記」では

茂勳は容堂に賛成したとある。クーデター前の芸州の動きより考えれば、「丁卯日記」の記事の方をとるべきだろう。このことは薩摩側の史料である前掲「折田要蔵日記抄」が会議の議論について「諸賢明公」は慶喜議定任命論を主張し、茂久のみが反対したと記述していることにも確認できよう。茂勳の回想、とくに政治的に微妙な部分についての回想は容易に信用することが出来ないのである。

もともとこの回顧録は、維新における茂勳の功績が埋もれているのを慨いていた手島が、それを永久に伝えようという意図のもとに刊行したものである（「はじめに」）。多くの回顧談がそうであるように、茂勳（あるいは編者の手島）も回顧の時点の価値観にしたがってその内容を修正したと見るべきだろう。そして、この一九二一年になると、岩倉の一喝の挿話はすでに事実として定着していたのである。

(74) 岩倉の一喝の挿話が登場する背景を本格的に検討するには、『岩倉公実記』編纂過程の全体的な分析が必要であるが、現時点での推測のみをここで記しておくことにする。

慶応三年・明治元年の薩摩関係の文書を編纂した史料に『慶明雑録』雑二（京都大学文学部蔵）がある。このなかに、おそらく二月二七日に書かれた薩摩藩士平田某の書簡の抜粋が収録されている。平田はクーデターの日、茂久に扈從して御所に出動しているが、その書簡のなかで、伝聞した第二回小御所会議の経過を以下のように記している。

「容堂が慶喜招致論を主張、公卿は誰も意見を言わず茂久のみ反論」土侯例之暴言何とか独り語なと被仰候由、外に岩倉少将太守様（茂久）御同意に御論為有之由、其後大久保市丈被罷出土侯え強

く其暴言を被発候処、尤と之御事候由、条理分明ゆへ御承服之御姿に御座候由、夫より又々後藤え大久保氏と議論に相及候処、内府之儀両条御請之上何分御評議之処に相決し、夜に入々々御朝議之節屹度御決議為相成と之事

傍線部の容堂の暴言の独り言を傍点部のように大久保が答めている。『慶明雑録』は、『岩倉公実記』が冒頭に記す引用書目の一冊である。あるいは右のくだりがヒントになり、それと「丁卯日記」の記述と合わせて、岩倉の一喝の挿話が創出された可能性もあるのではないだろうか。

(75) 大政奉還以後の慶喜の政治戦略、クーデターへの彼の対応については、拙稿B論文参照。

(76) 一二月二日の大久保・西郷の後藤への相談の内容は「寺村手記」、五〇一頁・一二月六日付松平茂昭宛春嶽書簡（伴前掲編書、七八頁）に示されている。

(77) 「寺村手記」、五〇二―五〇四頁。

(78) 「大久保日記」の二月九日の条の冒頭は、「今朝岩倉公、中山公へ参殿、御断決相進候」とある。この「御断決」の字句は、建言の最後の「（岩倉より）三卿え御断決被為在候様 御示談」と対応しており、この八日付建言は実際には九日朝に出されたのではないかと思われる。そうとするなら、「御尋問」が行われたのは八日夜であったろう。

(79) 「今先仮りに総裁議定参与之三職を置」（王政復古の大号令）。

(80) なおクーデター当日の一二月九日には加賀の前田康寧が上京している。しかし、彼は直ちに離京しているので、議定に任命されることはなかった。

(81) 「尾越の周旋は」右様御憤勵御坐候間、貫徹可致と相考候」(一二月一二日付養田宛大久保書簡、『大久保利通文書』(史)二、九〇頁)。

(82) 「玉を被奪候ては実に無致方事」(九月一八日の長州側と大久保との会談における毛利敬親・広封の発言、『大久保日記』)。

(83) 即時拳兵に反対し、大政奉還建白後に拳兵を期すべきとする一〇月五日の薩摩藩士新納嘉藤二の書簡(註(24))は、即時拳兵で「二時功を成」しても(つまり上方での戦闘に勝利し奪玉に成功しても)、「議論不合旨離意之藩々においては忽改て依頼随従すべくもあらず、又無縁之国々は尚更おもひもよらず」、とその限界を指摘している。

(84) 二つの正当性原理の比重を示すものとして長州の例を見ることができる。長州倒幕派は薩摩倒幕派以上に熱心な武力倒幕論者であった。そして、十一月二二日付品川宛書簡で木戸は以下のように述べている。「其期に先じて、甘く玉を我方へ奉抱候御儀、千載之一大事にて、自然万々一も彼手に被奪候ては、たとへいか様之覚悟仕候とも、現場之処、四方志士壮士之心も乱れ、芝居大崩れと相成、三藩之亡滅は不及中、終に皇国は徳賊之有と相成、再不可復之形勢に立至り候」(『木戸孝允文書』(史)二、三三八頁)。幕末政治史を奪玉戦と見る根拠によく使われる史料である。

しかし、このとき長州側は、薩摩の拳兵計画の変更を知っておらず(これが伝えられたのは十一月二七日付国元宛品川書翰(青山前掲書、二八〇頁)によってである)、この書簡が前提にしている、クーデター計画は、第二次出兵協定にもとづくものであり、上方徳川拠点への攻撃をふくんでいた。つまり、それは内戦を想定するものであり、新政権の平和的樹立など考えられなかった。この場合、

廟議が成立するわけはなく、内戦の旗印として天皇の身柄の確保が何よりも重視されるのはまた当然であったのである。そしてひとたび廟議が成立すると、長州側も、「長薩の朝廷たるやふにては不相濟」(『大久保利通文書』(史)二、一五七頁)、と天皇をかついでの強引な行動には躊躇を示すのである。